わが子のあゆみ

岐阜県PTAが作る子育て情報機関誌
3
2017.3 NO.447
春風号
第68巻5号

「磨く」

高山市立宮中学校は、教育目標「自主・友愛」の達成を目指し、学び舎と心を「磨く」学校です。自分の心を磨く、仲間と切磋琢磨して自分を磨く、そうやって自分自身の成長を確かめながら宮中学校を巣立ってほしいと願います。
表紙の写真は仲間とともに創り上げる合唱の風景と運動会の大綱引きの様子です。ともに自分自身の力は小さくても、一生懸命に自分を出して、仲間と一緒にさらに大きなものに創り上げる活動です。一人ひとりの表情に真剣さが伝わってきます。
この他に自分を磨くボランティアの朝の落ち葉掃きや朝掃除、地域と共に活動する運動会や文化祭など、自分と向き合い地域に支えられながら生徒達は成長していきます。

高山市立宮中学校（たかやましりつみやちゅうがっこう）

●【学校の教育目標】

「自主・友愛」

学校のたからもの

【かかみがはらしりつかわしましょうがっこう】

各務原市立川島小学校

●住所　〒501−6025　各務原市川島河田町1041−3
●TEL　(0586)89−2500
●FAX　(0586)89−7005
●メール　kes@he.mirai.ne.jp
●児童数　710名

学校の教育目標　**心豊かな　たくましい子**

沿革・地域の自然や風土

川島小学校区は、各務原市の南端に位置しています。岐阜県南部を流れる木曽川のつくる大小二島からなる中州となっており、東西約六㎞、南北約二㎞の楕円形に近い地形となっています。南は南派川を隔てて愛知県一宮市、江南市と接し、北は北派川を隔てて各務原市稲羽地区、羽島郡笠松町に接しています。

現在の川島小学校は、一九〇八年(明治四十一年)に各地区の学校が合併して、川島村立川島尋常小学校となってから一〇八年目を迎えています。一九五六年(昭和三十一年)に町制施行により川島町立川島小学校と改称しました。現在の校舎が完成したのは一九七八年(昭和五十三年)です。現在の各務原市立川島小学校となったのは、二〇〇四年(平成十六年)で、今年で十二年目となります。現在は児童七一〇名　教職員五十七名、二十五学級の小学校です。

校歌

川島小学校校歌

作詞　中村阿岐雄
作曲　太田博

一、あさひにはえる　伊吹峯を
仰ぐひとみも　はればれと
心いちずに　まなびつつ
希望あかるく　のびてゆく
われらの　川島小学校

二、島影うつす　大木曽の
水の流れの　清らかに
いのちの玉と　みがきつつ
ただしくなおく　そだちゆく
われらの　川島小学校

三、かがやく歴史　とこしえに
まどい楽しき　まなびやの
はえあるにわに　むつみつつ
まことの道を　進みゆく
われらの　川島小学校

活動の内容

学校のたからもの

笑顔

今年度より「一人ひとりを大切にする人間尊重の気風みなぎる学校」を目指し、キーワードを「笑顔」、合い言葉を「明るく・楽しく・元気よく」とし、「明るい笑顔」「元気な笑顔」の三つの笑顔があふれる川島小学校にすることを目指しています。「明るい笑顔」になるためには「明るいあいさつ」の習慣作り、「楽しい笑顔」になるためには「楽しく学ぶ」習慣作り、「元気な笑顔」になるためには「元気よく登校」できる習慣作りを大切にしています。

さらに、後期から全校で重点をかけている合言葉は「あ・そ・べ」です。小学校の時期は、休み時間には元気よく遊びながらルールや人間関係など、様々なことを学んでほしいという願いとともに「あ：あいさつ」「そ：そうじ」「べ：べんきょう」の三つを常に意識して取り組んでいこうというものです。学期末の児童の評価で、それぞれの項目について八十％以上を目標にして取り組んでいます。以下、この三つの取組を紹介します。

▲138タワーパークより

あ・そ・べ

①あいさつ

あいさつは、社会においても最も大切とされる基本的な行動様式の一つです。本校では、児童会の企画委員や六年生の愛校当番の児童が毎朝、児童玄関の前に立ち「あいさつ運動」を行っています。あいさつ運動を行う児童は黄色い手袋をはめて、通学班で登校してきた児童とタッチをしながらあいさつを交わしています。この二学期からは「あいさつ名人・達人」の取組みも始まりました。元気で気持ちのよいあいさつができたら、企画委員や先生方からあいさつカードがもらえます。その枚数によって名人や達人になれる仕組となっています。この取組をきっかけに、明るい笑顔であいさつできる児童が増えてきました。最近では、「○○先生、おはようございます。」と名前を付けてあいさつできる児童もいます。

▲登校の様子

②そうじ

そうじは、学びの場である施設・設備を美しく保全することを通して「そうじを頑張ってよかった。」という満足感(成就感、勤労の喜び)を味わう機会として位置付けています。その満足感が、基本的生活習慣の形成、奉仕や責任感の育成等にも結び付くと考えています。

本校では、そうじの前に全校で黙想を取り入れています。児童は、昼休みが終わるとそうじ場所に移動し、放送の指示に従って黙想を行います。そうすることによって、落ち着いた気持ちでそうじに向かうことができます。また、そうじの進め方を全校で統一したり、昨年よりそうじ時間を五分延長したりすることで、作業効率を高めながらじっくりとそうじに向き合う時間をとるようにしました。十二月に行われた美化委員会主催の「だまって掃除キャンペーン」では、黙想の後もおしゃべりすることなく、黙々とそうじに取り組む姿がたくさん見られました。

③べんきょう

べんきょうは、まず環境面の整備から始めました。「学習のユニバーサルデザイン化」を進めるために、教室前面にカーテンを付けたり、ペンキを塗って壁の色を統一したりしました。また、余分なロッカーや機器を撤去するなど、児童の集中力を阻害する要因を取り除くよう努めました。

授業では、算数の授業研究を全学級で行っています。ペア・グループ学習を取り入れたり、毎時間ポストテストを行い学習内容の習熟を図ったりしています。また、全学級で道徳の授業改善にも力を入れています。健全な心なくして、学力の向上はありません。地道な取り組みではありますが、粘り強く取り組んでいます。

▲授業の様子

▲そうじの様子

最後に

「明るく・楽しく・元気よく　笑顔でつながる川島小」を目指していく上で主役は何といっても児童です。そこで、二学期に児童会の役員が児童会マスコット作りを全校に呼びかけ、その図案を募集しました。集まった五一〇名分の図案の中から決まったのが「かわまる」です。この「かわまる」が描かれた児童会旗を作成し、児童の手による楽しい行事に生かしていきます。

学校のたからもの

【かいづしりつおおえしょうがっこう】

海津市立大江小学校

●住所　〒503−0623　海津市海津町古中島204番地
●TEL　(0584)54−5222
●FAX　(0584)54−5273
●メール　oe-sho@city.kaizu.lg.jp

●児童数　76名(男子39名　女子37名　H28.12.12現在)

学校の教育目標　強く正しく生きる大江の子

よく考える子　はげまし合う子　進んできたえる子

沿革・地域の自然や風土

明治五年、地域にあるお寺に学校ができました。翌年、温故義校として授業が開始されて以降、大江尋常高等小学校、大江国民学校、大江村立大江小学校、海津町立大江小学校を経て、現在の海津市立大江小学校となりました。今年で、開校一四三年目となりました。

本校は、岐阜県最南端の木曽三川下流域の輪中地帯にあります。自然に恵まれているとともに、古くから水の恩恵を受けながらも、度重なる水害と闘ってきた歴史のある地域です。

▲設立100周年を記念して建てられた碑

1 学校のたからもの　地域への誇りと愛着「大江ふるさと学習」

大江小学校では、総合的な学習の時間を「大江ふるさと学習」と称し、地域の豊かな自然や歴史を題材に特色ある学習活動を仕組んでいます。

自ら課題を見つけ、考え、解決する力を育てるとともに、治水に関わる地域の歴史を知り、先人の苦労や不屈の精神に学び、先人への感謝やふるさとを愛し、誇りに思う心の育成を目指しています。

一・二年生は「地域の施設」
三年生は「地域の農業」
四年生は「地域の自然」
五年生は「地域の福祉」
六年生は「地域の歴史・文化」
をテーマとし、体験的な学習活動を仕組んでいます。

各学年の「大江ふるさと学習」を紹介します。

◆一・二年生：大江を知る

地域にある木曽三川公園に群生するタンポポの種まきや移植を老人クラブの方と一緒に行っています。前年に植えたタンポポがいっぱい咲く公園で、タンポポ笛を吹くのが毎年恒例になっています。

◆三年生：大江を学ぶ

大豆作りを通して、地域の農作物作りの工夫や努力を学習します。地域の農家巡りをし、たまねぎやきゅうりの収穫体験を行っています。収穫した野菜は、全校に分け、家庭に持ち帰って家族でいただきます。

◆四年生：大江をつなぐ

本校には、ホタル池があります。ホタルの幼虫と揖斐川で捕った餌(カワニナの幼虫)を水槽に入れて世話をしています。また、水生生物調べを通して、環境を守ることの大切さを学んでいます。三年前からは、水に関わる環境について、木曽川上流にある小学校との交流も行っています。

◆五年生：大江でつなぐ

車椅子体験や高齢者疑似体験を通して、高齢者の方を理解し、関わり方について考えています。また、地域にある福祉施設の方とも交流しています。こうした活動を通して、思いやりの心をもち、助け合って生きることの大切さに気付き、共に生きるための在り方を追求しています。

◆六年生：大江からつなぐ

地域の伝統文化を探したり触れたりすることによって、先人の業績を学び、過去から現在に至る海津の歴史や文化について調べています。

平成二十二年からは、六年間の学習の集大成として、「美しい河川、その河川から私たちを守ってくれる千本松原をいつまでも大切に守っていきたい。」という願いを狂言で表現することを位置付けています。

「大江ふるさと学習」を通して、地域の自然や歴史を学ぶだけでなく、地域の方々との交流を深め、ふるさとを愛し、誇りに思う心が育ってきています。

▲狂言を能舞台で演じている様子

▲「大江ふるさと学習」の掲示

校歌

大江小学校校歌

作詞　近藤 虎之助
作曲　上野 忠平

一、緑こき　治水の杜を
渡る風　窓辺にかおる
薩摩隼人のいさおしを
年ふる松に　伝えきく
古き歴史の
われらがほこり大江小学校

二、あたたかき　恵みをうけて
南濃の　よく野にそだつ
稲穂の波の　にわに立ち
学びの道も　おおらかに
清く明るい
われらがほこり大江小学校

三、たゆみなき長良の流れ
よしきりの　ねいろこだまし
木曽　揖斐　長良の合うところ
ともにつどいて　たくましく
栄え伸びゆく
われらがほこり大江小学校

2 学校のたからもの　学校・PTA・地域協働「伝統の行事」

本校には、二十年以上続いている伝統行事があります。五月の「さつま芋の苗植え」、六月の「田植え」、十月の「稲刈り・芋掘り」、一月の「餅つき」です。さつま芋の苗植えと芋掘りは、縦割り班ごとに行い、上級生が下級生を手伝います。

田植えと稲刈りは、六年生女子が、昔ながらの早乙女姿で行います。地区ごとで、分担場所の田植えや稲刈りを行います。地域の方が手本を見せてくださり、上級生が下級生に教え、保護者の協力のもと、みんなで助け合って普段味わうことのできない体験をします。

収穫したさつま芋は、焼き芋にして食べます。同時に、保護者さん特製の豚汁も食べます。

収穫した米は、餅つきに使います。昔ながらの臼と杵を使った伝統的な餅つきを地区ごとに行います。つきたての真っ白な餅には、一年生が育てた冬野菜を茹でたものや、三年生が育てた大豆でつくったきなこをトッピングします。収穫の喜びを三世代みんなで味わいます。

もう一つ長年続いている伝統の行事、運動会があります。運動会は、準備・競技・片付け全てが、学校・PTA・地域の協働によるものです。保護者や地域の方の熱い声援の中で、自分の力を精一杯発揮する子どもたちは、どの子も輝いています。「全ては子どものために」という思いの保護者、「子どもは地域の宝」という思いの地域。学校行事を核にして地域コミュニティがつくられていることが、みんなの自慢です。

▲地域講師の先生から田植えの仕方を教わり、苗を植えている様子

▲早乙女姿で鎌を使って稲を刈っている様子

▲地域の方に手返しをしていただき、餅をついている様子

▲みんなで玉入れをしている様子

3 学校のたからもの　よいことみつけ「あやの花さく大江小」

児童玄関を入ると、「あやの花さく大江小」の文字が目に入ります。十八年前から取り組んでいる子どもたちの自慢の活動「よいことみつけ」です。小規模校の本校において、「あの子にはこんなよい面があったんだ。」と視野を広げることもねらいの一つです。

今年度は、「あやの花さく大江小」の活性化を目指し、年度初めに、絵本「花さき山」の読み聞かせをしました。主人公の生き方に感想をもつと共に、自分はどんな花がさかせられそうかイメージをもち、花のねうちをみんなで確認しました。見つけたよさを昼の放送や、学校だよりで紹介することで、みんながその子のよさを知ることにつながります。

これからも三つのたからものを大切に、「われらがほこり大江小学校」にしていきます。

▲児童玄関に掲示された一人ひとりのよさ

学校のたからもの

【しちそうちょうりつかみあそうしょうがっこう】

七宗町立上麻生小学校

●住所　〒509−0401　加茂郡七宗町上麻生2356番地1
●TEL　0574(48)1024
●FAX　0574(48)2391
●メール　s-kamiaso@hichiso.jp

●児童数　80名

学校の教育目標

「やさしく　かしこく　たくましく」

沿革及び地域の自然・風土

本校は、明治五年に上麻生本郷の宝樹寺に「文林舎」として創立し、大正十四年に上麻生尋常高等小学校と改称され、昭和三十年に上麻生村と神渕村が合併した際に、七宗村立上麻生小学校となりました。創立一四〇年以上となる伝統ある学校です。

校区を横断して飛騨川が流れ、その川岸から「日本最古の石」が、昭和四十五年に発見されました。この石は二十億年前の片麻岩で「上麻生礫岩」と呼ばれ、各学校や「日本最古の石博物館」等に展示されています。さらに、飛水峡一帯に点在する甌穴群（ポットホール）は、長い歳月の間に川の激流により岩が浸食されて壺状にえぐられたもので、約八八〇個あり、国の天然記念物に指定されています。

1 学校のたからもの　やさしく

【なかよしピクニック】

なかよし班（縦割り班）で、毎日の掃除や月一回のなかよし遊びを実施しています。児童会行事「なかよしピクニック」は、この班で協力して問題を解きながら、校区を探検するものです。コースは校区を三つに分けて毎年変わるように工夫されています。今年度のコースには、「日本最古の石発見地」「神明神社」などがあり、地域の自然や歴史にふれることができました。また、上級生が下級生の手を引くなど、心を通わせながら、巡ることができました。

▲なかよしピクニック 日本最古の石発見地

【思いやりの花を咲かせよう】

本校は、六年連続「ひびきあい賞」を受賞しており、今年度は「人権推進校」の指定を受けました。「思いやりの花を咲かせよう」を合言葉に、なかよし班で花を育て、デイサービスセンターなど、町内の施設に届ける「人権の花運動」に取り組みました。一学期はマリーゴールド、二学期はパンジーの花の苗を植え、全校が交代で水やりをして大切に育てました。「笑顔いっぱいの花」「ありがとうを広げよう」など、プランターには子どもたちがメッセージをつけました。各施設の皆さんにとても喜んでいただき、子どもたちにも笑顔があふれました。

▲人権の花を届ける

▲人権の花植え

【平和・友情の青い目の人形】

昭和二年にアメリカより日本に親善のために「青い目の人形」が贈られました。その一体が上麻生小学校の「メリーブランナー（メリーちゃん）」です。しかし、その後の戦争で、敵国の人形として、ほとんどの青い目の人形は焼かれてしまいましたが、奇跡的にメリーブランナーは、焼かれるのをまぬがれました。岐阜県内には、現在二体しか残っていません。毎月十一日を「命と平和・友情の日」とし、入学式や卒業式などには、メリーちゃんも一緒に参加して、子どもたちを見守っています。「青い目のメリーちゃん」を通して、平和・友情の大切さを学んでいます。

▲青い目の人形 メリーブランナー

校歌

上麻生小学校校歌

作詞　柏木 幹三
作曲　井深 隆司

一、みどりの山が　くっきりと
高くそびえる　ふところで
投げたり　とんだり　走ったり
元気に学ぶ　上麻生っ子
七宗の山が　みつめてる

二、そりたつ岩が　がっしりと
かたく手をくむ　ふところで
助け　励まし　認めあい
明るく学ぶ　上麻生っ子
おう穴群が　みつめてる

三、とびちるしぶき　きらきらと
清き流れの　ふところで
気づき　考え　つくりだし
じっくり学ぶ　上麻生っ子
飛水峡が　みつめてる

2 学校のたからもの　かしこく

【保小中の連携「LSS」】

保小中の縦の連携と、学校・家庭・地域の横の連携を大切にし、「LSS」を合言葉に基礎学力の定着や健やかな育ちを応援しています。LSSとは、Life（生活）Study（学習）Support（支援）の頭文字で、上麻生中学校の生徒会が考え、小学校・保育園に広まりました。子ども、学校、家庭・地域のそれぞれで、三つのポイントを明確にして取り組んでいます。また、家庭学習強化週間やノーメディアの取り組みも小中で足並みをそろえて活動しています。

▲PTA母親委員による読み聞かせ

▲LSS（生活・学習・支援）

【世界を広げる「読み聞かせ」】

本校では、読み聞かせボランティア（毎月一回）、PTA母親委員会（年二回）、上麻生中学校図書委員会（年一回）、学校職員（年八回）など、たくさんの方たちの力を借りて読み聞かせの充実を図っています。また、今年度は、職員や全校児童によるビブリオバトルを開催し、自分のお気に入りの本を発表することで、その本をさらに好きになったり、表現力を高めたりする活動にも挑戦しています。

3 学校のたからもの　たくましく

【命を守る訓練】

毎月十一日を「命と平和・友情の日」として、命を守る訓練を実施しています。また、学校を離れた登下校中や、宿泊研修（五年生）・修学旅行（六年生）先でも、命を守る訓練を実施しました。六月には、保小中合同の引き渡し訓練も実施しました。また、今年度は、「赤十字研究推進モニター校」の指定を受け、引き渡し訓練時に給食をなくして、非常食のビスケットを食べて待機訓練を行ったり、土曜参観日に親子防災教室（炊き出し訓練・ハイゼックス包装食づくり）を実施したりしました。「自分の命は自分で守る」という意識が高まってきています。

▼親子防災教室
炊き出し訓練

▲上麻生小学校 全校写真

学校のたからもの

【おおがきしりつあかさかちゅうがっこう】

大垣市立赤坂中学校

●住所　〒503−2213　大垣市赤坂町3421番地
●TEL　(0584)71−0830
●FAX　(0584)71−0848
●メール　akachu@ogaki-city.ed.jp
●生徒数 448名

学校の教育目標

「きびしく　あたたかく　ねばり強く」

沿革・地域の自然や風土

本校は昭和二十二年四月に不破郡赤坂町立赤坂中学校として創立されました。翌年に不破中学校青墓分校と合併して、不破郡学校組合赤坂中学校となり、昭和四十二年九月に大垣市と赤坂町の合併により大垣市立赤坂中学校と改称して現在に至ります。

校区には昼飯大塚古墳や美濃国分寺跡などの史跡が数多く点在し、中山道「赤坂宿」として繁栄した歴史があります。また石灰・大理石の産出による一大産業地として発展してきました。

このような歴史・自然・文化に恵まれた土地柄を生かし、本校では平成四年より「中山道に生きる〜ふるさと文化の再発見・その継承と創造〜」をテーマとして、特色ある教育活動を推進してきました。そして近年は「基礎的・基本的な学力を身に付け、主体的に学習する生徒の育成」を目指して、校区の小学校・家庭が一体となり、学力の向上につとめています。ここでは、こうした地域の素晴らしさを活かし、心の豊かさを育む本校の教育活動について紹介します。

1 学校のたからもの　円筒埴輪の制作・設置

今から約一六〇〇年前に築かれた岐阜県最大の昼飯大塚古墳が発掘・調査を経て整備され、歴史公園になりました。この歴史公園に設置される円筒埴輪の製作に、本校の生徒が携わって今年で四年目となります。

古代の人々に思いをはせながら、皆で協力して埴輪を製作していくことは、子どもたちにとって大変素晴らしい経験となります。そして製作された復元埴輪は現地に設置され、これから先も古墳とともにこの地で大切に守られていきます。

▲埴輪の製作

▲埴輪の設置

2 学校のたからもの　「中山道赤坂宿まつり」でのボランティア

毎年十一月に、中山道赤坂宿一帯で「中山道赤坂宿まつり」が開かれ、大勢の皆さんで賑わいます。皇女和宮の降嫁を再現した和宮・姫宮行列には、姫役として本校の生徒もあざやかな姿で登場します。赤坂中校区の各自治会や商工会などの団体が参加して行われる、この地域の一大イベントに、地域貢献の一つとして、本校の一・二年生が参加・協力をしています。

オープニングセレモニーでの演奏や各催事場でのお手伝い、また中学生ボランティアガイドとして案内をすることを通して、まつりに訪れた人とふれあい、おもてなしの心を育んでいます。

▲ボランティアガイド

▲中山道赤坂宿まつり

▲まつりでのボランティア

3 学校のたからもの　絆を深め、世界を広げる「絆プロジェクト」

二〇一一年の東日本大震災以降、自分たちで考え、自分たちができる活動に取り組むことを通して人々との絆を深める「絆プロジェクト」が始まりました。学校の周囲や付近の史跡で取り組む清掃ボランティア、読み終えた本・雑誌を回収して世界の子どものワクチンにかえる＝『せかワクぶっく』等の活動、被災地の復興を支援する募金活動、高齢者福祉施設を訪問して合唱を披露するお勝山ふれあいボランティア…。こうした活動は、子どもたちとまわりの人々をつなぎ、思いやりの心を育んでいます。

そして、まわりの人々と力を合わせて共に生きていくことを通して、子どもたちは「自分も社会の一員である」ことを自覚し、見つめる世界を一層広げていくことと思います。

▲福祉施設での合唱披露

▲被災地への募金支援

校歌

赤坂中学校校歌

作詞　殿内 芳樹
作曲　米村 正夫

一、心すがしき東雲の
光に映ゆる伊吹山
仰ぐ理想のしるべもて
うから友垣つどひつつ
あかるき平和きづかなん
ちかいは固し
われら赤坂中学校

二、ながれ遥けき清冽の
真澄たへざる杭瀬川
きよき志操のちぎりもて
学びの道をきわめつつ
ただしき文化ひらかなん
ほまれは高し
われら赤坂中学校

Contents

岐阜県PTAが作る子育て情報機関誌
平成29年3月1日発行／第68巻5号
通巻第447号

わが子のあゆみ

2017.3 No.447 春風号

表紙　高山市立宮中学校

学校のたからもの　1
各務原市立川島小学校／海津市立大江小学校／七宗町立上麻生小学校／大垣市立赤坂中学校

わが家の宝物　飛騨市立古川中学校PTA会長　圓山 正真　9

特集　「東日本大震災被災地を訪ねて」　11
西川果那（藍川中）熊田萌香（藍川中）矢口綾夏（岐阜西中）小谷千尋（岐阜西中）
於久田優友（星和中）橋本京佳（星和中）水谷綺良藍（陶都中）日室真亜沙（陶都中）
田中美結（長良中）磯貝晴香（長良中）所　孝樹（八百津東部中）藤本千夢（八百津東部中）

家庭教育応援団！㉕
実践紹介1　関市立板取川中学校　21
実践紹介2　下呂市立小坂小学校　21
実践紹介3　御嵩町立上之郷小学校　22

シリーズ「療育」㉚　岐阜県立羽島特別支援学校　23

お弁当の日　可児市立東可児中学校PTA会長　川上訓徳　25

わが家の約束
関市立博愛小学校PTA会長　杉山公宏　27
可児市立中部中学校PTA会長　奥村妙子　27

保健室ノート　岐阜市立白山小学校　養護教諭　安田伸子　29

私の先生㉕　本巣市立本巣中学校　教頭　岩井隆史　31

子育て半生記
養老町立高田中学校PTA会長　大橋博文　33

東濃地区のPTAふれあいニュース［vol.5］　35
多治見市立共栄小学校PTA
土岐市立濃南小学校PTA
瑞浪市立土岐小学校PTA
恵那市立飯地小学校PTA

私が出会った1冊の本【続30】　37
岐阜市立木田小学校PTA会長　福井友治
岐南町立岐南中学校PTA　戸崎貴夫

子の思い・親の願い・教育の窓　39
子の思い
大野町立西小学校　3年　林亜龍
羽島市立桑原小学校　6年　佐藤結香
郡上市立高鷲中学校　2年　田中亜由菜
親の願い
高山市立岩滝小学校PTA　副会長　中屋真由紀
中津川市加子母小中PTA　会長　今井広一
教育の窓
恵那市立恵那北小学校　教頭　石川斎
各務原市立緑陽中学校　教頭　塚本盛勝

親子ではてな　44
お試しクッキング　岐阜県学校栄養士会　46
下呂のみそ鶏ちゃん

ふるさとの伝承　47
高山市立久々野小学校

きらり！キッズ！　49
可児市立東明小学校

夢中！熱中！我らが部活　51
郡上市立白鳥中学校

私たちのPTA　53
瑞穂市立穂積小学校PTA

わが家の宝物

飛騨市立古川中学校
PTA会長　圓山 正真

私たちの宝物は『渡辺俊明』さんの絵です

息子が生まれたときの記念に私たちにとっては高価な絵を記念に購入しました。どの言葉にするか本当に迷い、何度か足を運んで決めました。

毎日、気分の良い日ばかりではありません。気分の乗らない日、元気の出ない日もありました。そんなとき『元気のでないひ　げんきですか　はい元気です　こうして自分によびかけてみます』この絵を見て、元気を出して今日も一日頑張ろうと気合いを入れました。

娘の生まれたときにも、『俊明』さんの絵を購入しました。

『たったひとつのいのちだもの大事にだいじにいたします』二人で選んだ言葉です。こういう気持ちで娘を大切に育てたいと意見はすぐに一致しました。

それと私は住職をしています。飛騨古川の三寺参りという三〇〇年以上続く伝統的なお参りがあります。そのときには大きなろうそくが奉納されます。この伝灯、この地域の良さを『宝物』として後世につなげていきたいものです。

特集

東日本大震災被災地を訪ねて

県PTA連合会は、県内六校十二名の中学生を昨年八月九日から十一日の三日間、石巻市に派遣し、市立門脇中学校の生徒との交流や被災地を視察しました。

地震発生から五年余が過ぎ、未だ復興も道半ばで風化が危ぶまれる中、中学生らは受け止めた思いを学校の仲間や地域の人々に伝えました。

本誌に寄せられた中学生の思いを紹介します。

中学生は地域の戦力！

岐阜市立藍川中学校　二年
前期生徒会書記　西川果那

震災から五年五ヶ月。何も知らない私が行ってもよいのだろうかという不安の中、石巻に行きました。二〇一一年三月十一日東日本大震災、この未曾有の災害があった地に私は立ちました。テレビや新聞などで事前に色々な事を調べていきましたが、自分の目で見て、体験された方の話を聞き、地震や津波の跡を見て、想像を絶する体験をされていた事を知りました。

東北地方中心に最大震度七、マグニチュード九・〇。最大八・六メートルもの大津波が約四千人もの命や町を奪いました。

家族を失ったり、バラバラになったり、津波で被害にあって残った唯一の家さえも放火されたりしたそうです。そうした体験を大人の語り部さんは身振り手振りで伝えてくださいました。ご両親を失われたそうです。お父さんは安置所で見つかりましたが、お母さんはご自身で崩れた家の中で発見されたそうです。そのお母さんの顔はボロ雑巾の様だったと言われました。私は、しばらく涙が止まりませんでした。

震災直後は何も食べられない日が続き、明かりはろうそくのみ、トイレの水は二～三時間かけて運び、避難所では、食料や水を何時間も並んでもらう日々。交流した中学生は小学校中学年の頃に被災し、小さな地震にも体が震え、その長く続いた恐怖で今までの記憶が薄れてしまったそうで、「家と思い出がほしい」と語っていました。災害は人の命を奪うだけでなく、人の心まで深く傷つけてしまうとても恐ろしい出来事だと改めて実感しました。

門脇中の先生は「中学生は地域の戦力！」と言われました。門脇中の人は避難所でのボランティア、掃除、お年寄りや子どものお世話など自分たちができる活動を次々としてきたそうです。この話を聞いて、中学生の力が求められていることを知りました。助け合うためには、人を大切にすること。私たちの周りでは大きな災害が起きていませんが、もしもの時は、中学生である私たちが率先して動くことが出来る。そして、その力は周りの人の役に立つのだと知りました。それで、普段から、避難訓練を真剣に行い、ボランティア活動に参加し、地域の方たちとの関わりを持たなければと強く思いました。

石巻市門脇町に「がんばろう！石巻」の看板があります。震災の夏、初代の看板の脇に小さなひまわりの芽が出ました。この苦難の中、塩害にも負けず、大きく育つ姿から、「ど根性ひまわり」と名付けられました。そのひまわりから今年、六世の種がとれました。来年度、私の中学校でも「ど根性ひまわり」の種を分けてもらい、ひまわりを育て咲かせる計画をしています。この花を咲かせ、この貴重な体験を自分の中学校や地域で伝え、災害への意識を高める活動をしていきます。

被災地訪問を通して

岐阜市立藍川中学校　三年
生徒会副会長　熊田朋香

何気ない毎日が津波によって一瞬で奪われたあの日から五年。人々の暮らしは、私たちが当たり前と感じる日常に戻っているのだろうと期待を持っていました。しかし、バスの中から見た石巻市内の風景は、辺り一面見渡せるほど何もない土地でした。期待とは真逆な風景に何も言葉がでませんでした。

津波の被害を受けた大川小学校は、河口から四キロの場所にあり、北上川を遡上してきた津波によって、児童七十四人、教師十人が犠牲となりました。訪問時の大川小学校の様子は、以前の面影もなく、とても悲惨なものでした。教室の天井も壁も破壊されていて、唯一、黒板だけがそのまま残っていたのが印象的でした。教室の二階も被害がひどく、津波の恐怖を改めて感じました。

門脇中学校の皆さんとの交流では、食料の準備、避難経路の確認、家族との集合場所を決めるなど、災害に対応するために十分な事前準備が必要だということを学びました。私たちも、学校で行う避難訓練だけを訓練とせず、地震がきたことを想定して十分な準備をしておくべきだと思いました。また、この交流で一番印象に残ったのは、「家と思い出がほしい」という言葉です。住む家があり、思い出となるものもある私たちは、とても幸せだと改めて感じました。

被災地を実際に訪問できたことは、私にとって貴重な体験となりました。この交流事業で学んだことを少しでも多くの人に伝えるため、東日本大震災による被害や現状、震災に備えての事前準備の大切さ、私たちが被災地のためにできることなどを全校生徒に話しました。

藍川中学校では、生徒会が中心となって、被災地復興のための募金活動「藍は日本を救う」を行っています。この募金は、被災地支援のために、家でお手伝いをするごとに親から一円をもらい、何回もお手伝いをして貯めたお金を毎週金曜日に募金するという取り組みです。今回、全校に、被災地の現状を伝えたことで、一人ひとりが震災を身近に感じ、自分の地域でも起こる可能性があることや、復興のためにまだまだ支援が必要であることを改めて実感してもらえたと思います。このことによって、募金人数が増え、今以上に、被災地の力になれればと思います。

交流事業に参加して学んだこと

岐阜市立岐阜西中学校
生徒会副会長　矢口綾夏

「自分の目で見て学んできたい。」

交流事業のお話をいただいた時、そう思いました。五年前の東日本大震災。家を次々

と飲み込んでいく津波や、地震で崩れた建物。テレビから映し出される見たことのない光景に大きな衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。五年経った今の被災地の様子や、震災を経験した方の思いなど、今だからこそ学べることを、実際に自分の目で見て、自分の耳で聞いて学びたいと思い、この事業に参加しました。

正直、五年も経っているのだから復興は完全に終わっていて、被災地とはいえ震災の面影はあまり残っていないと思っていました。しかし、実際に海辺の被災地を視察してみると、家が全て津波で流されてしまったかつての住宅街や、津波によってひびが入ったアスファルトなど、津波の脅威を思い知らされる光景が広がっていました。かつては地区で一番の住宅街が災害危険区域に指定され、もう二度と人が住むことができないという場所もありました。また、語り部の方の話を聞いて、予期できぬ災害によって一瞬で大切な人の命が奪われるなんて、どれほど悲しく悔しく辛いことなのだろうと思いました。

今まで当たり前だと思っていた生活が、存在が、帰る場所が、津波によって、災害によって一瞬で奪われてしまうのです。もう二度と戻ってこないのです。実際に被災地を見て、話を聞いて、災害の恐ろしさを実感しました。そして、今の自分を見直すきっかけになりました。

門脇中学校との交流では、実際の体験から自然災害が起きた時に私たちにできることを考えました。災害が起きた時、地域の人への声かけや物資運びなど、私たち中学生にもできることがたくさんあると知りました。東日本大震災が起きた時も、地域の中高生が活躍していたそうです。災害時、私たち中学生は大きな力になります。今からでも、災害が起きた時に自分に何ができるかを考え、備えておくべきだと思いました。

交流を終えて岐阜に戻った私たちは、全校生徒に向け被災地の現状と、災害時や災害に備えて自分たちに何ができるか、交流で学んだことを発表しました。皆、真剣に話を聞いて、災害と向き合うことができていたと思います。自然災害はいつどこで起きるかわかりません。予測することはできないけど、過去から学ぶことはできます。だからこそ東日本大震災での被害を風化させるのではなく、震災の経験から学び、災害に備えていくことが大切だと思います。私はこの交流で学んだことをより多くの人へ発信し、今後の生活に生かしたいです。

震災交流事業を通して

岐阜市立岐阜西中学校
生徒会副会長　小谷千尋

二〇一一年三月十一日に突然起こった東日本大震災。死者、行方不明者は二万人近くにもおよび、多くの人が悲しみ、苦しんだ出来事です。中学校生活最後の夏休み、私は震災の交流事業に参加しました。この事業に参加する前、私は震災についてあまり深くは考えていませんでした。しかし、事業に参加し、様々な人と交流し、震災について考え直すことができました。そして、本当に多くのことを学びました。

事業に参加して、私の心に浮かんできたことがあります。それは、今私たちは身近な人に感謝の気持ちを伝えることができているかということです。震災のために食べ物や飲み物を準備したり、家族で避難場所を確認したりするのももちろん大切な事です。

しかし、ここで私は日頃忘れがちな「身近な人たちへしっかりと気持ちを伝えることの大切さ」を伝えたいと思います。

今回の事業の中で、語り部の方の話を聞かせてもらう機会がありました。その語り部の方はこの震災で家族が亡くなり、本当に辛い思いをされてきました。自分の話を人に伝えるのにも長い時間がかかったそうです。「こんなことになるなら、日頃からもっと話をして、ありがとうと伝えておけば良かった。」という言葉が印象的でした。その言葉を聞いて、私は、「もし、自分の大切な人が突然亡くなってしまったら…。」と考えました。想像するだけで少し怖くなり、涙があふれました。私たちが当たり前だと思っている毎日の生活はとても幸せなことなのです。家族や友人など、周りの人が支えてくれているおかげで今の自分があるのです。仕事で疲れていても家事をして、塾の送迎をしてくれる母。毎日、朝から夜遅くまで働いている父。時には喧嘩もするけれど、優しい心をもっている弟。学校で仲良くしてくれる友達。私たちの暮らしている毎日には、どんな小さいことでも、このように誰かの支えがあるはずです。そのことを忘れずに生活していきたいです。だからこそ、「身近な人への感謝の言葉」を私は大切にしたいです。

ここに私が書いていることは、今回経験して感じたことのほんの一部です。実際にはもっと多くのものを見て、聞いて、感じてきました。東日本大震災は、決して風化させてはいけない出来事です。私は、この事業に参加して学んだことを周りの人に伝えたいです。私の話を聞いた人たち、この文章を読んだ人たちが、少しでも震災について考え、これからの生活に生かしてくれることを願います。

「自然災害は他人ごとではありません」

大垣市立星和中学校
生徒会長　於久田優友

二〇一一年三月十一日、東日本大震災が起こりました。約六年たった今、ほとんどの人が覚えていると思います。この出来事から僕たちは、いつ起こるかわからない自然災害に対して、何かするべきだと思います。

僕は、去年の八月に「被災地中学校との交流事業」に参加しました。この交流事業では、防災面でたくさんのことを得ることができました。僕は、宮城県石巻市での現地視察で印象に残ったことがあります。それは大川小学校で体験したことです。大川小学校は東日本大震災で津波の被害を受けました。津波の被害により児童七十四名が亡くなりました。天井の板ははがれており、いたるところで鉄筋がむき出していました。校舎の二階を結ぶ渡り廊下は、校舎から切断され地面に倒れていました。現在この校舎は、被災した当時のまま保存されているため、実際の様子をまのあたりにすることができました。

被害の大きさに驚かされましたが、被災前この地域は地震が起きても津波はこないだろうと言われていました。僕たちが住む大垣市は、地震による津波がくる可能性はゼロに近いです。ですが、地震や洪水などが起こる可能性は十分にあります。だから、僕たちはもうすぐ起こるといわれている南海トラフ地震に対して、何か備えをする必要があるのではないでしょうか？

まず、災害が起きる前に備えることとして二つ学んだことがあります。一つ目は、食料や水が十分あるか確認することです。災害が起きたとき、最低三日分の備蓄が必要だといわれています。二つ目は、地域の人たちとコミュニケーションをとることです。地域の人たちとかかわりを持つことで、災害時に助けてもらえることもあります。また、僕たちが地域のお年寄りや小さい子どもに声をかけて、助けることができるかもしれません。

僕は、「被災地中学校との交流事業」で学んだことを去年の十二月に学校で発表しました。聞いてくれた生徒の皆さんが、東日本大震災での出来事を思い出し、自然災害が決して他人ごとではないことを知ってほしいです。そして、災害が起きても正しく対処し

てほしいと思います。

自然災害はいつ、どこで、どのように起こるかわかりません。それでも災害時、臨機応変に対応できるように常に意識をして生活することが大切です。この日を機に災害について意識を変えてみてください。たった一つしかない自分の命や家族の命を守るためにも考えてみてください。

（写真は、大川小学校での校舎から切断された渡り廊下の写真です。）

「何を学んで伝えていくのか」

大垣市立星和中学校　三年
生徒会副会長　橋本京佳

日常生活の中で防災について考える事はありますか？

私は東日本大震災の地域の方々と交流をしました。その際、私は「防災では何をしらいいのか」「自分たちのような中学生に何ができるのか」ということを考えました。

石巻市内の視察では、ニュースでも放送されていた津波が直撃した場所にいきました。震災当時あった瓦礫はすっかり無くなっていましたが、ただそれだけでした。家の基礎が残っているだけの何もない土地になっていました。震災以前の写真を見させて頂きましたが、今とは真逆の風景でした。そこで多くの方が家と共に流され、約四，〇〇〇人の犠牲者が出ました。今は震災の影響で、もうひとが住むことはできなくなっています。

また、大川小学校も見に行きました。その小学校でも多くの犠牲者がでました。そこは防災マップでは津波が来ないとされていて逃げ遅れてしまい、北上川から逆流してきた津波にのまれてしまいました。大川小学校は壊れたまま今も残っています。変形したやかんやスコップ、鉄骨がむき出しになったコンクリート。まだ様々な所に震災の爪痕が残っています。

被災地の中学校の一つ、門脇中学校の生徒と交流をしました。そのとき、彼らに教えてもらった避難の時にとても重要な言葉があります。「津波てんでんこ」それは方言で「津波が来たときはそれぞれの考えで逃げる」という意味だそうです。災害がある時は「絶対に大丈夫」という事は無いという意識をもつべきだということを教わりました。自信と油断が命取りになるのです。災害に予報などはなく、予想外の事ばかりです。しかし今の私たちは災害に備えた準備や、避難経路の確認はできていないと思います。

私たち位の年齢の人に何ができるのか知るために交流をした中学生の皆さんに、当時の中学生がどのように周囲に働きかけていたのかを聞きました。一番多かったのが全国から届いた支援物資を配るのを手伝う人だったそうです。これは、配給をスムーズにして、取りに来られないお年寄りの助けになっていました。他には混雑する避難所の受付を手伝う人もいたそうです。被災された人たちは皆不安な気持ちでいっぱいです。中には、大事な人を亡くされて心の余裕がない人もいました。しかし、その中学生たちは人の力になろうと行動を起こしていたのです。思いやりを忘れない彼らの働きは多くの人の心の支えになっていました。

そのような話を聞いて、私たちには何ができるのか考えました。先ほど挙げた中学生たちが行ったことは私たちにできると思います。他にもできることは見つかるでしょう。

東日本大震災からもう五年経ちます。平和な日常を送っている今だからこそできることがあります。震災のことが風化しつつありますが、自分たちが被災するかもしれない南海トラフのためにも忘れないで伝えていきたいです。

被災者の「原動力」と関わり方

多治見市立陶都中学校
水谷綺良藍

「大川小学校」。これは、多くの人が知っている小学校だ。今回の交流事業で、私は、その大川小学校を訪ねた。

屋根から塩水をかぶり、赤い屋根が赤黒く、しっかり繋がっていたはずの渡り廊下は、途中で折れて、地面についている。天井も骨組みが見え、穴があいている。しかし、そんな中、目に飛び込んできたのは、がれきの中から顔を出す向日葵。このようにがれきの中から必死に顔を出す向日葵は、「ど根性向日葵」と呼ばれている。当時、そして現在の被災者の方々は、この「ど根性向日葵」に元気をもらいながら、「向日葵が太陽を向くように、人々は前を向いてきた。」みなそれぞれ助けられたものがあったのだ。友人、家族などの身近な人が、人を支え、人に支えられながら、それぞれ前に一歩一歩進んできた。そして、五年経った今でも、一人ひとりがそれぞれの望み、「復興」、「次世代に繋ぐ」、「その地域のものを生かした産業」、これらを叶え地域の復興を進めてきた。

しかし、その中でも、まだ復興できていないところがあった。これは、津波の影響で、波にさらわれ、何も残らないからである。これらのように、広い地域に渡って津波の被害があり、その地域では、あまり復興が進んでいない。また、仮設住宅で生活している人もおり、今も多くの仮設住宅が残っている。

このように、復興が進んでいる一方、進まず、止まっているところもあるのだ。復興が進んでいるところは、さらなる産業発展へ、復興がすすんでいないところは、あきらめず前へ進むことが大切だと思う。あと、何年経てば完全に復興するのか。あと何年経てば、みんなが笑って過ごせるか。あと何年経てば、それぞれの家に帰られるのか。あと何年経てば、みなが自由に過ごせるのか。そんな日がくると思っていれば、みなの望み、希望を叶えられる日は遠くないのではと思った。みなが希望を捨てずに、あきらめず希望の明日に向かい、一歩一歩、前に進められるよう、人々が働きかけていき、それぞれの望む明日へ歩んでいけるようにしたい。そのために、私たちは、募金やボランティアに参加し、すべての地域が復興するまで、支援することが大切である。

また、今回の交流事業を生かして、次にくるかもしれない南海トラフ大地震まで、地震が来たらどこに避難するか、しっかりと話し合い、訓練を何度も行ったり、実際に、災害の際に使う道具に触れてみたりして、災害に対しての意識を高めることが大切だと思った。だから私は、訓練を真剣に行い、災害を防ぐための知識をおぎない、いつ災害が起きても正しい行動がとれるように、心掛けていきたい。そして、困っている人がいたら、助ける、自分が困っていたら、助けてもらうなど、支えてもらう関係を築いていきたい。

繋ぐ　この想い届け…

多治見市立陶都中学校
日室真亜沙

私が、東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加して、とても衝撃を受けたことが大きくわけて二つあります。

一つ目は、地震が起きたときの対応です。今までは先生の指示に従うだけで何も考えていませんでした。常に命を守る為にはどう

するべきなのか、次どんな行動をとるべきなのか、を考えるトレーニングすることが必要であり、考えることにより災害がおこったときの対処法も身につけられます。

二つ目は「事前準備」です。いつ起こるか分からない震災は常に警戒が必要です。情報伝達手段、避難経路、防災倉庫の中身の確認、が挙げられます。特に中身の確認は、もしもの時に正しく使用できるのかが問われます。また、情報伝達手段は大きな地震が起きたとき、どんな影響を及ぼすのか一人ひとりの耳に正しい情報が全て入る保障は一切無いということ、一人ひとりが災害に備えてどんな準備が必要か考え直すことが課題です。

私は、全校集会で「被災した時に私たち中学生が出来る事、被災地の中学生の頑張り」を発表しました。被害を受けた場合、私たちはケガの応急手当、小さな子どもの遊び相手、高齢者の方へのマッサージや話し相手、環境維持の為の定期的な掃除が出来ます。私たちは、人と人を繋ぎ支えることが出来る大切な存在であるということを語りました。

そして、私たちより何百倍も辛くて、悲しい思いをしたにも関わらず、一日でも早い復興の為に『がんばろう！石巻・支えあう友愛・絆』を合言葉に皆で苦しみから逃げず全員が前だけを見て進んでいる事を伝えました。

未来の為に、同学年の門脇中学校の生徒の皆さんは、町の公園の設計をし、私たちに到底できないことをやり遂げようとする彼女達は、何倍も大人に見えました。今当たり前のように生活できていることに感謝をするべきとも話しました。

今、私が住んでいる多治見市は、市全体で参加する避難訓練は行われていません。だから、まず市全体でやる避難訓練が必要だと思います。また、近所の人との関わりをもつきっかけにもなり、震災が起きた時の役割分担も一緒に行えます。このように地域全体で行動することにより信頼も生まれると思います。

今後、一番の課題は東日本大震災の風化だと思います。地震により、家や建物が全壊した場所がたくさんあります。建物は何回も建て直すことが出来ます。しかし一度傷ついた心は癒えるまでに時間がかかります。被害を受けた人と被害を受けずにテレビ画面を見て終わった人との地震への関心の違いがとても大きいと思います。

また、マスメディアの取り上げ方も五年前と比べるととても少なくなっていると思います。だから被害を見たひとりの人間として、石巻の仲間から受け継いだバトンを、次の世代の人に伝え、二度とこのような甚大な被害が起こらないように私たちの手で防いでいきたいです。

東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加して

岐阜市立長良中学校
生徒会長　田中美結

二〇一一年三月十一日。東日本大震災が起こりました。その時テレビで流れた津波に飲み込まれていく街の映像を、私は忘れることができません。

震災から五年がたった今、東北の様子は、ほとんどテレビでは知ることができません。私は、自分の目で見た今の東北を、そして、そこで感じたことを私の学校や町に広げ、私たちのこれからにつないでいきたいと思いました。そこで、私は、被災地中学校との交流事業に参加し、宮城県石巻市に行きました。

宮城県の海岸沿いには、家の基礎が残ったまま、草が生え放題になってしまっているところや、整備はされていても、何もないところがたくさんありました。五年がたった今でも、震災の跡はまだまだ残っていました。被災地での交流の中で聞いた言葉は、一つひとつがとても重く、ずしんと私の心にのしかかってきました。しかし、出会った方々は、誰もが笑顔で接してくださり、復興に向かう前向きさが伝わってきました。この研修では、多くのことを学び、考えさせられました。

その中でも、特に心に残っている言葉があります。

「今を楽しく、一生懸命生きてほしい。」

自らの体験をありのままに語ってくださった、語り部の方からの言葉です。私は、この言葉の意味や、どうすることが「今を楽しく、一生懸命生きる」ことにつながるのか考えました。

私は、石巻市立門脇中学校を訪れたとき、今、何でももらえるとしたら、何がほしいか、現地の中学生に聞きました。返ってきた答えは、「家」と「思い出」でした。津波は何もかもを流してしまうため、思い出が形となった写真は残りません。あるのは、人の心にある思い出のみです。私は、この答えを聞いて、とても驚きました。私の住む岐阜には、津波と深いかかわりがあまりないからなのかもしれません。しかし、明日、一ヶ月後、一年後に何が起こるのかは、誰にもわかりません。だからこそ、自分で積み重ねていく今を大切にしたいと思います。

また、今、私たちには、当たり前のように家があり、当たり前のように支えてくれる両親や仲間がいます。夢に向かって努力することは大切だと思います。でも、それ以上に今、身の回りに広がる「当たり前」という幸せをかみしめ、感謝すること、周りの人たちを大切にして、その人たちの命を、自分の命をつないでいくことが大切なのだと思います。

私は、今、何かしてもらったときに、「ありがとう」ということや、何でも前向きにとらえることを大切にして生活をしています。私は、思ったことをすぐ行動に移すことが苦手でした。でも、この研修を通して、後で後悔しても遅い、自分に挑戦できる自分になりたいと思うことができるようになりました。私は、この研修で、東北の方々の心のあたたかさと前向きさに触れることができました。私は、今の東北の様子とともに、東北の方々の心をもっとたくさんの人たちに知ってもらいたいです。そして、私たちが今できることを一緒に考えたいです。私は、今できることを精一杯やりきっていきます。東北の方々の前向きさに負けないように。

東日本大震災被災地中学校との交流事業に参加して

岐阜市立長良中学校
生徒会グリーン部長　磯貝晴香

私は、三日間宮城県石巻市へ行きました。東日本大震災から五年と半年がたった被災地の様子を見たり、現地の中学生と交流活動をしたりしました。

実際に石巻市へ行くと、まず「何もない」と思いました。がれきは残っていないものの、建物もなく、遠くまではっきり見えました。

特に印象に残っているのは大川小学校です。大川小学校では信じ難い光景が広がっていました。海から四kmも離れているのに、その地域には、大川小学校以外の建物はありませんでした。その大川小学校も津波や津波によって流れてきた物によって、渡り廊下が根元からおれ、横たわっていました。誰もいない学校、むき出しになっている金属の柱、何もない町が、津波の恐ろしさを物語っていました。門脇中学校との交流の中で、当時の様子について聞くと「何が起きたかわからなかった。」と口をそろえて教えてくれました。また五年半たって変わったことを聞くと「前の石巻を忘れた、思い出せない。」と言っていました。津波によって、建物だけでなく思い出までリセットされてしまったのだと思いました。

「自助・共助・公助」門脇中学校の先生から聞いた言葉です。まず三日間は自分で生き延びる「自助」。地域の人と協力して生きる「共助」。国などからの援助を待つ「公助」。この東日本大震災では、全国からの支援物資やボランティアスタッフによって助けられたことも多かったそうです。だから、命は守るだけでなくつなぐことも大切だと感じました。

また、普段から家族で避難場所や避難経路を確認したり、避難用持ち出し袋を用意したりしておくことで「自助」につながります。

そして地域の人とコミュニケーションをとることで「共助」にもつながってくることがわかりました。

岐阜に戻った後、長良西地区で行われた防災訓練に参加しました。あいにくの雨でしたが、隊長さんの「雨だから、震災の起きた時の天気がよくない場合も考えて行動できる。訓練である今日できないことが、震災のときにできるわけがない。」という言葉が印象的でした。

また、私たち長良中には避難訓練はありません。あるのは「命を守る訓練」です。多分これは、ただ避難するだけではなく、より安全な場所に逃げ、自分の命を自分で守れる人になるためだと思います。私は石巻市で命を守ることはもちろん、つないでいくことの大切さと、自然災害による被害を減らすために普段から逃げる用意をしておく必要があるということを学びました。だから今後、ボランティア活動に参加し、今回学んだことを伝え続けていきたいです。

震災から学ぶ「命の大切さ」

八百津町立八百津東部中学校
生徒会副会長　所　孝樹

僕がこの研修の中で一番学んだことは、「命の大切さ」です。東北の研修に参加させていただく前の自分は、人間関係に悩み、毎日が退屈に思っていました。しかし、被災地で当時の自分の年齢よりも若くして亡くなった子の石碑を見たとき、それまでの自分が情けなく思えてきました。そして、五年たった今でも震災の跡が残っていることに衝撃を覚え、もし自分が、自分の学校が、そして自分の街がそうなってしまったらと思うと、それだけで涙が出てきそうになりました。

仙台市に着いて街を見たとき、地震の爪痕は見られず、すでに東北は復興しているのではないかと感じました。しかし、都市部を外れると、一面の田んぼになり、少しずつ震災の跡が見えてきました。海から離れているところでも津波の被害に遭ったことがわかり、改めて地震や津波の恐ろしさを知りました。

初日に訪問した大川小学校は、震災当時のまま残されているものがたくさんありました。抜け落ちた壁や床、落ちているほうき、くしゃくしゃになっている扇風機や柱、何よりも折れたはさみが落ちていたことが心に残りました。誰のものかわからないはさみが刃の部分だけ折れているのが衝撃的でした。五年も経っているけれど、震災当時の被害の様子が手に取るようにわかりました。

二日目、石巻市で現地の中学生と交流をしました。とても明るい子たちが迎えてくれて、質問にもすぐに答えてくれました。とても辛い経験をしているはずなのに、笑顔で接してくれたことに驚き、彼らの姿から生きていく強さを感じました。

午後には、震災で両親を失った高橋さんのお話を当時の津波被害の映像とともに聞きました。「どれだけ辛いことが起きても、今日だけなら頑張って生きていける気がする。」「今を大切にする。」高橋さんのこの言葉を聞き、一日一日を大切にして生きていく生き方に共感し、自分も今を頑張って生きていこうと思いました。

「つなぐ館」では「ど根性ひまわり」の展示がありました。流されたがれきの中でも成長してきたひまわりの存在から、生きることはこんなにも尊いものなのだと、心を打たれました。

三日間の出来事の一つひとつを全校集会で仲間に伝えました。聞いてくれた仲間は「自分たちにできることは何か」と、真剣に考えてくれました。震災から五年経ってもまだ復興はしきっていません。見た目では、街は復興してきているように感じられたけれど、本当の復興は街が元通りになるだけでなく、住む人がまた笑顔で元気に、生き続けたいと思うことだと思います。中学生の自分たちにできることを考え、大切な命を一つでも多く守っていけるように日頃からの意識を高めていきたいと思います。

中学生の僕たちにできること

八百津町立八百津東部中学校
生活委員長　藤本千夢

僕はこの東日本大震災の被災地中学校との交流事業に参加して、報道で知っていたこと以上の被災地の現実を知ることができました。

初めに行った閖上の記念碑のあるところでした。海から離れており、津波とはあまり縁のないところだと思っていましたが、そこにあった写真や津波到達地点の高さまであるオブジェなどを見て津波の脅威を改めて感じました。そこから見える景色には、家のあった跡がいくつもあり、さらに草が茂っており、津波の強さや震災が起きてから月日が経っていても復興されないまま荒れていくのを感じ、悲しくなりました。

大川小へ行ったときも壁や天井などが崩れていたり、体育館であったところが跡形もなくなっていたりして、川の近くはとても怖いと感じました。そこでの死者は八十四人で裏山へ逃げればよかったのに、近くの橋の上へ逃げてしまい、津波にのまれてしまいました。裏山へ逃げていたら八十四人の人の命が助かったかもしれないと考えると、とても悲しくなりました。

門脇中学校との交流をして、中学生としてできることを考え、事前に考えたこと以上に僕たちができることがたくさんありました。避難所の掃除、小さい子や高齢者のお世話、日常から周囲の人とコミュニケーションをとることなどです。他にも、門脇中学校の生徒さんが避難所で生活していて大変だったことや地域によって物資に差があったことなどがわかりました。

移動中などに、川や海の近くで堤防を造っていたり、津波避難ビルになっているビルや道路に避難通路を設けたりするなど、震災からもう二度と大きな被災が出ないように取り組んでいました。

三日間学んできたことを全校の前で発表しました。実際に起きていたことに驚いたり、悲しんだりする仲間がいました。僕たち中学生が、震災が起きたときにすべきことやできることを話したときはうなずいて理解し、共感してくれました。

僕の住んでいる地域はあまり大きな地震が起きたことがなく、非常持ち出し袋などを事前に準備している人は少ないです。避難する場所も「多分ここだろう」と確信がない人もいます。南海トラフ大地震が発生する恐れがあるといわれています。いつ起きても対応できるように事前の準備をしなければならないと思います。さらに、中学生としてやらないといけないことを理解しているだけでなく、実際に行動に移せるように日頃から意識したり、訓練したりしていきたいと思います。そして、家族で話し合うなど、自分たちの意識を周りへ広げていきたいと思います。

家庭教育応援団！～家庭教育学級取材記～

実践紹介1　関市立板取川中学校

ポイント ○ 2つのねらいを見事に達成した学校再編後1年目の家庭教育学級

平成28年4月、洞戸中学校と板取中学校が再編し、板取川中学校となりました。学校再編後の親同士のコミュニケーションを深めたいという願いから講演会につながる内容で「子育てサロン」を開催しました。子育てサロンで保護者同士の距離がぐっと縮まった後は、全家庭で「わが家の約束運動」に取り組みました。

講演会（親子）
◇演題：「情報モラル講演会」
◇講師：中西 將之 氏（LINE 株式会社）

子育てサロン型意見交流会
◇子育てサロン型の意見交流：「ネットとの付き合い方」

わが家の約束運動在宅取組へ
◇実践：各家庭で約束を決め、「話そう! 語ろう! わが家の約束」運動に取り組む

〈感想〉（取組カードより）

・使う量や時間帯を毎日考えて使用することができたのでよかった。これからも家族でルールを決めて使用していきたい。 生徒

・ネット上には様々な情報があふれ、便利な反面、恐ろしくもある。ネットの情報を鵜呑みにせず自分で考え、判断できる力を身に付けてほしい。このような情報モラルについて家庭でもよく話し合っていきたい。 保護者

「学校再編後の保護者同士のコミュニケーションを深める場にしたい」という願いと、「ネットトラブルに巻き込まれないよう、親も子も学びたい」という2つの願いのもと開催された家庭教育学級。「家庭教育プログラムみんなで子育てⅢ『ネットとの付き合い方』」を活用し、企画運営をしました。また、実態に即した講座にしようと「家庭教育学級運営マニュアル」を参考に保護者対象事前アンケートを実施し、講演会の後にミニ講座（講師が保護者の質問に答える時間）を設定することで保護者の不安を払拭し、2つのねらいを達成することができました。「家庭教育学級運営マニュアル」「家庭教育プログラムⅡ～Ⅳ」には家庭教育学級運営のヒントがたくさんつまっています。ご覧いただき、ぜひご活用ください。

実践紹介2　下呂市立小坂小学校

ポイント ○ 家庭内の会話や共通体験を大切にした「家族チャレンジ」

昨年度から金銭教育実践校として「人・物・お金を大切にする」ことに取り組んできた小坂小学校。金銭教育と同様、「食育」にも力をいれてきたという実態を受け、PTAふれあい委員会が、学校と家庭が連携・協働して、家族で買い物や料理に取り組む『家族チャレンジ』を「わが家の約束運動」にしました。

▲買い物にチャレンジ　▲クッキングにチャレンジ

児童
たまごは、やいてぱたんとじょうずにたためたので、おいしくできました。

保護者
味噌汁の出汁を昆布と煮干しでしっかりとってもらいました。作って食べる喜びを一緒に味わいました。

見習いたいポイントは、普段から学校が大切にしている既存の取組に無理なくPTAの思いを重ね、在宅取組としたことです。買い物や料理といったどの家庭でも行われていることに、「親子の会話」や「親子の共通体験」という色をつけ、意図的に家庭内のコミュニケーションを深めた素敵な取組です。

実践紹介3　御嵩町立上之郷小学校

ポイント ○ 親子が向き合い、家族のきずなを深める「親子ふれあいカード」

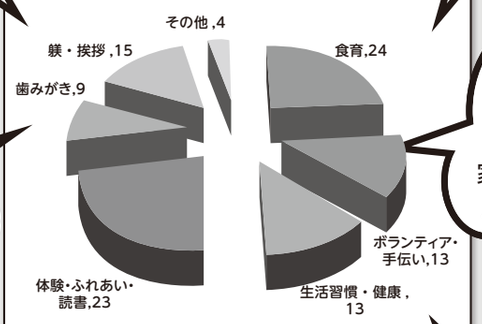
上之郷小学校では、岐阜県家庭教育支援条例が公布されたことを受けて、これまで以上に地域・家庭での教育を大切に考え、親子が向き合い、家族のきずなを一層深めてほしいという願いのもと、「親子ふれあいカード」の取組を企画しました。

取組終了後、PTAで実践をまとめて全保護者に報告をし、さらなる実践への啓発を行いました。

その他
毎日新聞を読む。興味のある記事について親子で話し合う。
6年男子

食育
子どもは野菜に水をやる。保護者は採れた野菜を料理する。
3年男子

本年度の実践内容
平成28年度 親子ふれあいカードの内容



PTAより発行されたまとめ（一部）

ボランティア・手伝い
子どもがリビングの片づけをする。家族みんなは出したらすぐ片づけることを意識する。
3年女子

躾・挨拶
毎日元気にあいさつをする。明るいトーンを心がける。
4年男子

体験・ふれあい・読書
親子順番に一日交代で絵本を読む。
2年女子

生活習慣・健康
テレビを消して食事をする。学校であったことを家族に話す。
1年男子

親子で話し合い、食育、ボランティア、生活習慣、健康、体験活動、ふれあい活動、読書などのテーマを決めて、それぞれの家庭に合った実践が行われました。

上之郷小学校の取組からは、日常の中に「わが家の約束」になり得るヒントがたくさんあることを教えられました。無理なく継続できる秘訣は「身の回り」にあり!

県のホームページでは、他にも家庭教育学級の情報を発信中！ぜひご覧ください！！

岐阜県　家庭教育学級　検索

－掲載内容－
・平成23～27年度家庭教育学級の実践
・家庭教育学級運営マニュアル「みんなで子育て」
・家庭教育プログラム「みんなで子育てⅡ（乳幼児期編）」
・家庭教育プログラム「みんなで子育てⅢ（小・中学校編）」
・家庭教育プログラム「みんなで子育てⅣ（次世代編）」

お気軽にご相談ください！
家庭教育学級や企業内家庭教育研修等、内容から講師選定までご相談に応じます。

岐阜教育事務所	☎058-278-3059（直通）
西濃教育事務所	☎0584-73-1111（411）
美濃教育事務所	☎0575-33-4011（441）
可茂教育事務所	☎0574-25-3111（445）
東濃教育事務所	☎0573-26-1111（373）
飛騨教育事務所	☎0577-33-1111（422）

岐阜県立羽島特別支援学校

所在地＝羽島市正木町大浦1230－1

1 学校の特色

岐阜県立羽島特別支援学校は、平成二十八年四月「岐阜県子どもかがやきプラン」に基づいて、岐阜南部地域に開校した新設の特別支援学校です。

知的障がい、肢体不自由及び病弱のある児童生徒を対象とし、初年度は一一六人でスタートしました。児童生徒は、羽島市、羽島郡二町、岐阜市南部及び各務原市から、四台のスクールバス、名鉄電車、コミュニティバス、自転車及び保護者送迎等の方法で通学しています。

開校にあたり、この地域の子ども達や皆様と、ともに学び、ゆたかに育ち、社会に自立していくことができるよう「ともに学びゆたかに育つ」という校訓を掲げました。この校訓を胸に、教職員が一丸となって、児童生徒の支援をしていきたいと考えています。

2 各学部の様子

○小学部

『げんき　なかよし』を合言葉に遊びや体験学習の取組の中で、基本的生活習慣の獲得や生き生きと活動する児童を目指しています。

近隣施設や地域の小学校を活用しての遊具遊び、学校周辺の畑を利用した野菜づくり、地域のスーパーでの買い物学習と地域とのかかわりを大事にしながら活動しています。また、居住地校交流も積極的に行い、居住する地域の学校の児童と一緒に活動し、思い出に残る交流ができています。

○中学部

元気いっぱい笑顔あふれる二十三名の生徒たちは、『仲間と学ぶ』を合言葉に自分の夢や課題に挑戦し、それぞれの可能性を探る学校生活を送っています。

中学部から始まる授業の一つに作業学習があります。そこでは、「食品」「手芸」「クラフト」の三つの作業班に分かれ、将来の職業生活に関心をもち、働く意欲や基礎的な技能を身に付けていけるよう段階的にステップアップしていきます。十二月に行われた学校祭では、作業学習の成果を発表する機会を得ることができました。また、自立活動等の授業では、興味や関心の幅を広げたり、生活の中で活用できたりする確かな力を身に付けています。

○高等部

重点目標は、自立と社会参加に必要な基本的な力を身に付け、主体的に活動できる生徒の育成です。作業学習、就業体験、行事等の教育活動を通し、生徒が自立できるよう指導しています。

また、選挙権年齢の十八歳以上への引き下げを受け、主権者教育にも取り組んでいます。羽島市選挙管理委員会と連携し、選挙での障がい者への配慮等の講話、模擬投票所での生徒会選挙を実施し、選挙体験を積み重ねています。

3 PTA活動の紹介

開校初年度のため、PTA会長を中心に『保護者の皆様が楽しく、負担が少なく活動できる』を一番に考え、会則を作り活動しています。

①「三校交流会」

当校は、主に大垣特別支援学校、海津特別支援学校からの児童生徒が多く、大垣・海津・羽島の三校で楽しく過ごす機会を作りたいと考え「三校交流会」を行いました。

当日は、三校の校長先生はじめ先生方も来て下さり、とても華やかな会となりました。プレイルームで遊んだり、ゼリー作りをしたり、校内見学、茶話会と皆さんとても楽しんで下さいました。

帰りには、「また来たい」「来年はプールがいい」という嬉しい言葉を聞かせて下さり、当校の役員が参加者の皆さんからたくさんのお心遣いを頂き、とても大切な思い出となる会となりました。

②各委員会の活動

●広報誌「ふじたより」発行

羽島市の竹鼻別院の藤が毎年見事な花を咲かせるように、子ども達も大きくたくましく育ってほしい、そんな願いを込めて「ふじたより」という名前をつけました。文字も絵も当校の先生に書いて頂き、温かみのある上品な題字となりました。

PTA活動を中心に、子ども達の活動や学校のこと等、広報委員会で年二回発行をしていきます。

●事業所見学会

子ども達の卒業後の進路を考えるにあたり、事業所見学はとても大切です。その中で、楽しみも作りたいということで、当校に五月に学校見学に来て下さった岐阜本巣特別支援学校も見学させて頂きました。校長先生が出迎えて下さったり、いろいろな先生方が説明をして下さったり、カフェ和で岐阜本巣のPTA会長、役員の方と交流をさせて頂いたり、とても楽しく温かい気持ちになれた見学会となりました。その後、清流園のカフェレストDonoでランチ、清流園の見学をしました。色々な施設を見学させて頂き、説明して下さり、大変参考になりました。

研修委員会中心に、今後もこのような事業所見学を年二回行っていきたいと思っています。

●テトラパック回収作業

八人の厚生委員を二班に分け、毎月交代で給食の牛乳パック（テトラパック）の箱詰め作業を行っています。洗って乾かし、回収カゴに入れるまでは、先生方と子ども達がやっています。十一月からインクカートリッジの回収も始めました。学校に行く回数の多い委員会ですが、子ども達の活動の様子を垣間見たり、いろんな話をしたり、保護者同士の交流の場にもなっています。

③初めての学校祭PTAバザー

十二月にありました学校祭にてPTAバザーを行いました。チケット制で二種類のお弁当とお茶の販売を行いました。チケット作業の係と当日販売係と、役員を半分に分けました。それぞれとても頑張って下さり、全く問題なくスムーズに行うことができました。いつもは委員会ごとの活動ですが、今回はいろいろな方と情報交換などされていました。「楽しかった。」「お弁当おいしかった。」の声を聞かせて頂き、学校祭同様、PTAバザーも大盛況となりました。

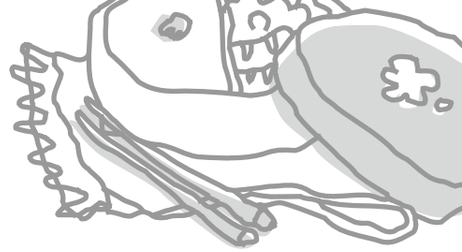
4 保護者の願い

当校の標準服は『どの生徒も美しく着ることができる』を一番に考えたものです。高等部の作業服や各学部の体操服は、着やすさも考え選定しました。「うちの学校の制服や体操服、かわいい」と子ども達からの言葉はとても嬉しく思います。標準服は当校オリジナルである為、通学の時はすぐ本校の生徒だとわかります。何か困ったとき、助けてもらえたら、という想いもあります。

校章やスクールバスのデザインは、岐阜工業高等学校デザイン工学科の生徒さんがデザインして下さいました。そして、岐阜南部に長い間なかった特別支援学校の開校は、地域の方に温かく受け入れて頂き実現したものです。

この様な思いと感謝の中、保護者として、子ども達が充実し楽しい学校生活を送ることができる様、そして地域の方に愛され信頼される学校になります様、先生方と共に学校を盛り上げ支えていきたいと思っています。

お弁当の日



可児市立東可児中学校PTA　会長　川上訓徳

「ドラマ」の中で感じること

○活動の経過

可児市の東部に位置し、校区が多治見市境と接する東可児中学校は、桜ヶ丘ハイツという団地内に設立された中学校で、同じく設立されている桜ケ丘小学校と一小一中の学校です。そのためか地域とのつながりが深く、家庭、学校、地域で協働で子どもたちを育てているという環境にあります。

そうした環境の中で東可児中学校の「お弁当の日」は、毎年秋に、ＰＴＡの芸術鑑賞会の日に併せて実施しています。

子どもたちは、各家庭で自分で自分の昼食を考えて作ります。

ＰＴＡ活動として「お弁当の日」に取り組むことに大きな意味があるわけではないのですが、中学生にもなればやはり自然と次のことがキーワードとなって取り組むことになるのではないでしょうか。

一．旬の食べ物を意識し、食べ物に関心を持つ。

二．日頃食事を作っている家族に対し感謝の心を持つ。

三．お弁当を作る際に楽しく調理する。

そして、欲を言えば「健康な体を作るための栄養バランスを考えて食材を工夫する」ことになると思います。

○大人と子どもの感想

東可児中学校では、家庭の協力によるこうした「作業」は、この「お弁当の日」だけではありません。

夏休みの宿題の一つとして、「一家庭一実践」と称して家庭でいろんな「作業」に取り組みます。その「作業」は、家族に食事を提供するものもあれば、家事の手伝いとして庭の草取りや洗車など多岐にわたります。

なので、「お弁当の日」として子どもたちが台所に立つことへの抵抗は少ないように受け止められますが、やはり、いくら中学生とはいえ、普段取り組んでいないことをやられるとついつい口を出したり、手を貸したりといった「余計な心配」がつきまといます。

ところが、やきもきしながらいざやらせると、親も子どもも笑顔になるのは不思議なものです。

そこには前の日からの食材の準備に親子で一緒に買い物に行くことから「ドラマ」が始まっているようです。好きな食材を購入し、翌朝に調理をする段階で、再び議論と思考が親子間で飛び交います。登校までの少ない時間で効率よく調理することも一つのハードルとして存在するようです。

そして、ゴールと思って登校した後も、まだ「ドラマ」は続いているようです。

友達、クラスのみんなはどんな弁当を作ってきたのか、見せ合いするわけではないですが、女の子だとお弁当を詰める容器にもいろいろな思いが出てくるようです。

子どもは、口には出さないですが、自然と台所で調理するというハードルを下げているようです。自然と、食事で使用した食器を洗う手伝いをしてくれることは、その証拠だと感じ取れます。

▲実践レポート

○大人への願い

子どもたちを学習面・生活面で教育するのは大人です。人工知能でもないし、もちろん子どもたちが自発的に学び取るわけではないと感じます。

大人は、いきなり大人になったわけではなく、自らの経験をもとに子どもたちを指導します。

そこで、大人の思いがうまく子どもに伝わらないもどかしさを感じることがあります。

この「お弁当の日」に関しても同じだと思います。

大人になれば、栄養のバランスや旬の食材を意識したりなど、食への関心がこれまで受けてきた教育（自発的なものも含めて）をもとに高められていきます。子どもに「好きなものばかり食べていないで野菜も食べなさい」というのは、食事の際の会話でよく聞かれます。

そうした自分の体を作っていく上で摂取する食べ物に上手に関心を持たせるのがこの「お弁当の日」だと私は感じます。

中学生にもなると、保護者への感謝と食材への関心、自ら工夫して作ることへの楽しさを十分に感じ取れる年ごろだと思います。

また、大人としてもう一つ関心を持ってもらいたいのが、環境への配慮です。

「お弁当を作る際にはまず食材を洗う。水を使いすぎていないか。」

「どうしても生じる使用しない部分をどのように処理するのか。あるいは使うのか。まだ使えるのではないのか。」

「この食材は、どこで産出されたものか。加工食品の原材料表示はどのように記載されているのか。」

こうしたことに関心を持ってもらうことも大事ではないでしょうか。

○課題と今後

子どもたちは成長し、遅かれ早かれ社会へと出ていきます。

社会へ出れば、弁当が必要となってくることもあるでしょう。

毎日当たり前に弁当が作られていることを当たり前と思わず、自分たちがお弁当を作ったこと、作ったときを思い出してほしいと思います。

そして、これからも「お弁当の日」だけでなく、常に食に関心を持っていってもらいたいです。

立ちどまらない保険。
MS&AD
三井住友海上

三井住友海上は、
ロケットはつくっていませんが、
ロケットが宇宙を目指す
未来をつくっています。

世界では宇宙開発が
目覚ましいスピードで進んでいます。
宇宙には未知の可能性があります。
しかし同時に未知のリスクも伴います。
三井住友海上はロケットや人工衛星の打ち上げなど
宇宙ビジネスにおけるさまざまなリスクに対応。
宇宙開発の未来を支えていきます。

未来は、
希望と不安で、
できている。

明日をつよく。
三井住友海上

www.ms-ins.com

話そう！語ろう！わが家の約束

「あいさつ」「朝ごはん」「お手伝い」

関市立博愛小学校PTA会長　杉山 公宏

杉山家の巻 68

わが家の約束ごとは「あいさつ」です。毎朝「おはよう」の声で元気かどうか分かります。「ただいま」「おかえりなさい」「おやすみなさい」と必ず声をかけ合います。

朝ごはんは、必ず作ります。子どもが朝ごはんを食べなかったのは、病気の時以外は無いと思います。この朝ごはんを毎日食べる習慣は、私も小さい時から食べてきたので、当たり前のことです。

DSのゲームを欲しがった時には、買う前に約束をしました。一日三十分、宿題をやってからしか使わない、自分の部屋へ持っていかない、です。今まで、何度か約束が守れなかった事はありますが、目に余るような使い方をしていないので、この約束は継続中です。

お手伝いをするとお小遣いをもらえるご家庭がありますが、うちは、家族の一員なのだからお手伝いは当たり前です。やりたくないという時もありますが、その時は家族の一員として扱いません。そうすると、お手伝いしますよ。

子どもの成長を願って

可児市立中部中学校PTA会長　奥村 妙子

奥村家の巻 69

わが家の約束事は次の五つです。

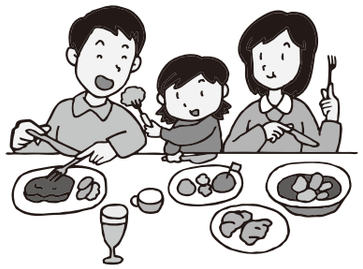
一、挨拶・返事をきちんとする。
二、自分の事は自分でする。
三、休日は、家族全員で食事をする。
四、家のお手伝いをする。
五、自転車に乗るときはヘルメットを着用し、交通ルールを守る。

どの約束も小さな頃から続けてきたことなので、子どもも自然と守っています。

お手伝いは、自分の部屋の掃除や料理を楽しみながらやっています。

食事中は、学校の事や最近のニュース・話題などについて、家族でコミュニケーションをとる時間が増えました。

子どもには、基本的な生活習慣・自立心や自制心・善悪の判断・挨拶や礼儀・思いやり・社会のルールなどを身につけ、家庭や地域社会において豊かな人間関係を築ける人になってほしいと思います。



school infirmary

保健室ノート

●岐阜市立白山小学校
養護教諭
安田　伸子

ある日の保健指導から

睡眠をテーマに

授業のはじめにアンケートを実施したところ、午後九時半までに寝る子どもは三十％で思っていたより少なく感じました。睡眠時間が九時間以上という子どもは四十一％です。ご家庭の事情もありますから、みんながみんな九時半までに就寝することは不可能なことです。見たいテレビややりたいゲームもありますが二十四時間の限られた中で、子ども自身が〝今〟本当にやらなければいけないことを選択できるようになってほしいと思います。

食事の話になって

睡眠の話から朝食の話に移りました。理想とされる洋食の絵には、パン、牛乳、サラダ、ハムエッグがあり、和食の絵には、ごはん、具だくさん味噌汁、野菜の和え物、焼き魚がありました。似たような朝食をとっている子もいましたが、忙しい朝のことですから子どもたちから聞かれたのは「ないない」「無理」「多すぎる」の声でした。

そして、本日の給食の話に。その日の献立と主な材料です。

○小型パン
○牛乳
○きしめん（きしめん・鶏肉・干ししいたけ・人参・油揚げ・かまぼこ・花鰹・ねぎ）
○小イワシのからあげ（小イワシ・生姜・でんぷん・米粉）
○切り干し大根のごまよごし（切り干し大根・削り節・ほうれん草・ごま）
○プリン

これらの食品を、体をつくる赤グループ、熱や力のもとになる黄グループ、体の調子を整える緑グループに分けながら給食ではたくさんの材料が使われて野菜も多くあることがわかりました。朝食で野菜が不足気味であっても、給食はこのようにバランスがとれ野菜も多く摂れます。ですから、給食はできるだけ残さず食べるように話しています。

睡眠も食事も、保護者の力が最も大きなところですが、子どもでも自分でできることを考えて取り入れる力がつくようにしたいです。

先日、四年生の学級で保健指導を行いました。保健室へ体調不良で来る児童に、昨日からの様子を聞くことがあります。

「昨日、何時ごろ寝たのかな。」
「わからん。時計見てない。」
「決めてない。眠くなったら寝るから。」

時々聞かれる答えです。

【早寝・早起き・朝ごはん】もうすっかりお馴染みの言葉です。本校においては、朝ごはんを食べてくる児童はほぼ全員ですし、朝寝坊で遅刻する児童もほとんどいません。ですから、この三つの中では、【早寝】が最も気になるところです。

保健指導を終えて

久しぶりに教室に入って保健指導を行い、子どもたちの元気な姿、声、にこにこした表情に、とてもうれしくなりました。私の問いかけに、身を乗り出して訴える姿が本当に微笑ましく、私自身がずっと自然に笑顔でいられた一時間であり、終日気持ちよく過ごせました。

以前勤めていた学校で、年明けのインフルエンザが流行していた頃だったと思います。放課後、寒い中、六年生のA君が保健室の窓から「先生もかぜに気をつけてね。」と声をかけてくれたことがありました。A君とは、普段あまり接する機会はなく、帰る方向とは反対の保健室前にわざわざ立ち寄り、優しい言葉をかけてくれたことに本当に驚き、幸せな気持ちになりました。

他の人からの心ない言葉や態度で傷つき辛い思いをすることもあります。そんな思いを癒してくれる場や物は多々ありますが、人は人で癒されるものだと思います。

久しぶりにA君を思い出し、子どもの健やかな成長を助けていきたいと改めて思いました。

pleasure

イラスト&クイズ

PN. もみじ（羽島郡）

PN. マカロン（海津市）

QUESTiON -1

サルはサルでも練習をするサルはな〜んだ？

出題・渡辺香澄（土岐市）

〈答えは45ページ〉

生きてはたらく言葉

本巣市立本巣中学校　教頭
岩井　隆史

中学校の卒業時に「必先自勝」という短冊を贈ってくださった教頭先生。高校時代、数学の教師になりたいと考え始めたころ「まずは夢に出てくるまで問題を解いてごらんなさい。」と、本気で取り組むことを教えてくださった数学の先生。浪人時代、県外へ出ることばかり考えていた自分に「最終的に君はどこ（の県）で貢献したいんだ？」と諭してくださった予備校の担任の先生。私は、これまで出会った恩師から、道しるべともいうべきたくさんの言葉をいただきました。友人や、その後に出会った職場の方々、子どもたち、保護者の方々からも、励ましの言葉や教えていただいた言葉がたくさんあり、そのおかげで今の自分があります。

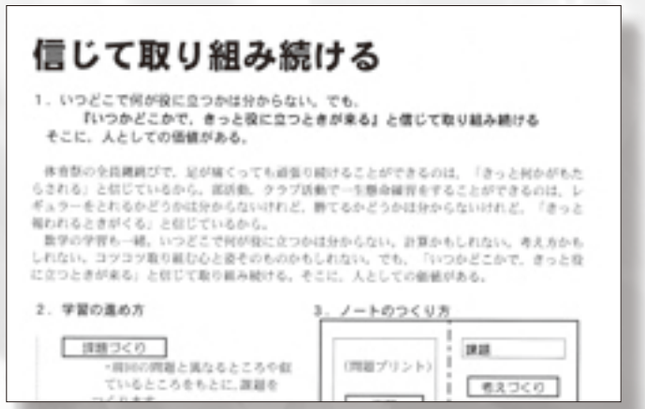
さて、今回、私が書かせていただくのは、大学時代、最も大きな影響を受け、今なお多くのことを教えていただいている恩師の話です。

頭の中であれこれ考え悩んでいるときには「まず動いてみなさい。」、先輩方が激励に来てくださったときには「その場面場面で誰を大切にすべきなのか、気付いて動ける人になりなさい。」など、人として大切なことをいくつも教えていただきました。学生時代、最も印象に残っているのは、二年生になって初めて先生の授業を学び、評価が出たときのことです。先生は「私は、代数学（という科目）の評価をしたのであって、みなさんの人間性を評価したわけではないですよ。また、頑張りましょうね。」とおっしゃいました。先生は、ひたむきに頑張る姿を見ていてくださる。なんてエネルギーの湧く言葉なんだろう…　そう感じた私は、教員となってから、実際にこの言葉を使っています。

卒業後、私は一時期、先生から離れたことがありました。しかし、そのうち本業である数学のことが分からなくなり、何年か苦しむことになります。そのとき、勤務している学校に研究室の先輩が赴任してみえました。ある日、先輩は、私を再び先生のもとへいざなってくださいました。「大丈夫。私は、頑張ろうと努力する人を応援しますよ。」の言葉に心がぐっときたのを、今でもはっきり覚えています。

それからは、とにかく勉強し直しの日々。「子どもに算数や数学を教えたいと言うのなら、まずは教師自身が、その学習内容にどんな意義があるのか、どんな魅力があるのかを見つけなさい。」「どの子にも学習内容が伝わるように、教師自身が算数・数学の用語を正しく使いなさい。」「中学校数学の学習の何が将来の役に立つかは、人によって異なります。何か役に立つことがあるかもしれないと『信じて取り組み続ける』ことに、人としての価値があります。」「子どもたちから、あの先生は算数や数学をよく知っている、と憧れをもたれるような教師になりなさい。それが授業を通しての生徒指導ですよ。」など、先生からいただいた言葉を実行し、また、自分もその言葉を使う中で、本当にこれが大切なんだと実感するようになりました。

生きてはたらく言葉…　私も、いつか子どもたちに、生きてはたらく言葉をかけることができる人になりたいです。


信じて取り組み続ける

1．いつどこで何が役に立つかは分からない。でも、
「いつかどこかで、きっと役に立つときが来る」と信じて取り組み続ける
そこに、人としての価値がある。

体育祭の全員縄跳びで、足が痛くっても必死り続けることができるのは、「きっと何かがもたらされる」と信じているから。部活動、クラブ活動で一生懸命練習をすることができるのは、レギュラーをとれるかどうかは分からないけれど、勝てるかどうかは分からないけれど、「きっと報われるときがくる」と信じているから。

数学の学習も一緒。いつどこで何が役に立つかは分からない。計算かもしれない。考え方かもしれない。コツコツ取り組む心と姿そのものかもしれない。でも、「いつかどこかで、きっと役に立つときが来る」と信じて取り組み続ける。そこに、人としての価値がある。

2．学習の進め方

詳細づくり

3．ノートのつくり方

（問題プリント）

課題

考えづくり

先生からいただいた言葉をタイトルにした
授業びらきのプリント（平成 21 年度）

子育て半生記

自立と　受け継ぐべきもの

養老町立高田中学校PTA会長　大橋 博文

私の家は養老山脈の北端の山裾に居を構える兼業農家です。幼少期当時の家族は祖父母、両親、叔母、そして私と三歳で他界した弟、そして六つ年の離れた妹がおりました。

父母は仕事勤めに忙しく、小学生の頃までは主に祖父母と過ごす時間が長く、また旧満州やフィリピンへの兵役経験のある厳しい祖父と信仰の深い祖母でしたので、現代の我が子世代からすると慎ましい生活だったと思います。

幼少期は風呂とご飯も蒔木で炊いていた為、天候の良い日曜はしばしば山へ木を伐り出しに行ったり蒔木を割ったり、農繁期は田植えに収穫と祖父・父親に連れられ当時は随分と子どもとしての自由を限られたという思いがありました。適当な事を言ってはサボる口実を作ったりしていましたが、嘘が見つかったり反論したりすれば言葉よりも先に張り手や脚が跳んでくる祖父であったので、そんな田舎の暮らしが嫌で嫌で、いち早く自立して田舎から外に出ることが当時の私の大人への目標でありました。

日曜に農作業をしていると傍を通る幹線道路をスピードに乗って遠くに走り去っていくバイクや車に憧れを抱いたのもこの頃でした。陸軍の車両部であった祖父が幸いにも農機具の動かし方や整備を時折教えてくれていたので、中学生終盤には自分の生きていきたい方向のようなものは見えていた様に思います。

しかしながら思春期になると両親との関係はうまくいかず、新聞に載ってしまう様な事件に友達と巻き込まれ、校長室に母を呼ばれたりと、全く親不孝な思春期であったと反省する今日です。母は涙ながらにただただ平謝りしていたのを思い出します。

その頃、厳しかった祖父は病床に伏し、翌年には他界してしまうのですが。今では理解できるのですが父自身が高校生の頃に父方の祖父を亡くしたと聞いており、おそらくその様な思春期の息子の扱いには慣れていなかったのかもしれません。

そして社会に出てようやく自立した「つもり」で簡単に故郷を離れることはできましたが、本当の意味での自立は全く簡単ではありませんでした。仕事一本での経済自立、他地域での人との関りも少なく時間に追われる生活、全てにお金が纏わる食生活と、どれをとっても困難が付きまとう事ばかりで数年後には身体を壊してしまいした。

これを機に仕事を変え、実家に戻り家族を設けるも、また大病・手術と重なる親不孝をし、まだ小さかった我が子の将来を想った時に弟を亡くした家族の本当の気持ちが理解できたような気がしました。親より先立つ事ほど人としての親不孝はなく、逞しく生きる知恵として祖父母や両親からの育てと支えがあり、同時に自分が恵まれた環境に置かれていたのだと感じました。叱ってくれた祖父や人としての道を教えてくれていた祖父母、じっと我慢してくれた両親に感謝し、それに報いる為には自分はまだまだタイヤする訳にもいかないとも。

幸いに健康を取り戻した今、できる間に子どもたちに受け継ぐべきは、やはり生きる為の知恵であると思います。お金を稼ぐ手段だけの仕事ではなく、仕事に追われる為だけの時間でもない事、目標を定める事、幾度とある挫折を乗り越える力や他者からの支えと感謝の気持ちであると思っています。

現在、定年して長らく経つ父は田畑仕事を生きがいとし、孫たちが美味しいと言ってくれる野菜や米を作り、私も営農組合に入り再び、若造として勉強中の身であります。

子どもの頃から培った田舎ならではの生活の楽しみ方を満喫しつつも、老いてまだ元気でいてくれている両親に感謝しており、どうにかここで家と墓を守っていきたいと考えております。

こうして今まで積み重ねた親不孝を償っていければとの気持ちのもと、ＰＴＡにも母校である小学校に続き、かつては母と呼び出された母校中学にも少しばかりでも役に立てるならばと参画し二年目となりました。

今では、毎元旦に仏間座敷で家族写真を撮り、食事をし、祖父母や両親、私たちの古い写真を出してきては、子どもたちの知らない昔の話をすることが数年来の恒例になっており、子どもたちと色々話し合っております。

子どもたちが親となった時に、同じように集まって笑い合えていてくれればと、切に願っております。

pleasure

イラスト&クイズ

PN. うさぎの王子☆（美濃加茂市）

PN. マルフェルタ（関市）

QUESTION-2

しないでするスポーツは？

出題・横山輝大（山県市）

《答えは45ページ》

東濃地区のPTAふれあいニュース

vol.5

父親による読み聞かせ活動

多治見市立共栄小学校PTA

共栄小PTAでは、平成二十五年度から、十一月の授業参観の日に、『父親による読み聞かせ活動』を行っています。

読み聞かせは、想像力を育てる、親子のコミュニケーションが図れるなどの良い点があります。特に、父親が行うことで、普段聞きなれている母親とは違った男性ならではの表現の豊かさを期待しています。子どもたちには、目を輝かせて聞き入る姿も見られ、たいへん好評です。

ただ、担当する父親の皆さんが負担を感じられるのではないかと心配するのですが、今年も「子どもたちが最後まで集中して、いろいろな反応をしているのを感じ、読んでいて楽しかった。」「緊張したけど、子どもたちと一緒に本の世界に浸ることができ、貴重な体験をすることができた。」などの意見が多く、手ごたえを感じています。

今後も、子どもたちが喜ぶ姿を期待して活動を継続していこうと考えています。

親子で「小中合同愛校作業」

土岐市立濃南小学校PTA

濃南小学校は、二年前に二つの小学校が統廃合され濃南中学校の敷地内に誕生した新設校です。全児童七十五名、小中学校では百三十二名の小さな学校です。

今年初めて、小中合同PTA活動を計画しました。その一つとして、「小中合同愛校作業」を夏休みに行いました。小中学校PTAの作業の区分けはしましたが、学校周辺の草刈りや通学路整備、草取りが主な作業内容です。

当日は、雨だったにも関わらず全児童生徒と草刈り機などを持った全保護者が集まりました。作業中は、安全に気をつけながら、時間の過ぎるのも忘れ黙々と作業を続けました。作業終了後には、綺麗になったグラウンドを見て「小中全員でやると気持ちいいね」「小中合同運動会が楽しみ」という声も聞かれました。

今回の「小中合同愛校作業」を通して、親子にとって、楽しく充実した交流になりました。今後も、このような企画を立て濃南小中学校をサポートしていきたいと思います。

ふれあいを大切にしたPTA活動

瑞浪市立土岐小学校PTA

土岐小学校では、親子・地域とのふれあいを大切にした活動を行っています。

一つ目は、運動会での「PTA親子競技」です。親子競技は、ほのぼのした雰囲気の中にも親子の絆が垣間見えます。

二つ目は、父親委員企画の「親子ふれあい魚つかみ」です。小学校の前を流れる土岐川で、親子が協力して魚を捕るだけでなく、自然の厳しさを知ってもらうことが、子ども達にとって、何よりの体験となっています。

三つ目は、母親委員企画の「親子ふれあいコンサート」です。地域の中学校及び高校の吹奏楽部に依頼し、地域の方も招待して演奏会を開いています。生の演奏の迫力に感動し、中学校・高校で吹奏楽を始める子もいます。

このように、土岐小学校では親子・地域が協力して、子ども達を共に育てる〝共育〟を心掛け、取り組みをしています。

親も子も楽しめる「親子ふれあい活動」

恵那市立飯地小学校PTA

本校では、毎年夏休み最初の土曜日に、PTA役員主体で「親子ふれあい活動」と題し、親子でのふれあい活動を行っています。

昨年までは、ますつかみやペットボトルロケットを作成して飛距離を競ったり、昔ながらの火起こし体験など色々な活動を行ってきました。

今年は熊本地震をはじめ、各地での災害が目立つ年でもありましたので、地元の消防団の方に講師をお願いして協力してもらい、救命救急講習と親子で実際に地震体験車に乗らせていただきました。地震体験車では、震度7クラスの揺れを体験し、地震の恐ろしさを改めて感じることができました。

お昼には、アルミ缶を使ってご飯を自分たちで炊く「サバイバル炊飯」を行いました。初めてアルミ缶でご飯を炊いたという親子がほとんどでした。「炊飯器のありがたみがよくわかった」という感想をもった親御さんがいるほど大変な作業でしたが、いつものご飯よりも美味しいと言う笑顔の子どもたちを見て、いい体験ができたのではないかと思います。

このような活動を今後も続けていきたいと思います。

私が出会った1冊の本【続30】

日本人にしかできない「気づかい」の習慣

上田 比呂志 著
クロスメディア・パブリッシング

岐阜市立木田小学校PTA会長　福井　友治

本との出会い

私は職人（大工）として、家という作品とお客さんや協力職の人々との関係を大事にしてきました。

七年前の怪我で、縁のある建設会社に身を寄せ、大工以外の仕事を学んでいく中でより多くの人々との繋がりやお付き合いをするようになりました。

そんな中、人様との気持ちの良いお付き合いとは？粋な計らい、余計な気を使わせない、そんな絶妙な気遣いを学んだ本です。

お勧めの理由

ＰＴＡ活動を通じ感じていた事、そして単位ＰＴＡ会長になって多くの皆様と知り合い、多くの取り組み、それぞれの悩み、紡いでいかなければいけない想い、目指すもの。その事すべてが、気づかい・心配り・おもいやり・我慢といった、心や気の使い方なのだと教えてくれる本のように思います。

そして、その素質は日本人なら誰もがそういった感性を備えていると書かれております。

それは、気づかいは文化的なもので、古くから日本が独自に培ってきたことだと書かれております。

例えば、「恥」という言葉は使い方も色々ありますが、それらが意味する感覚は、日本人の感性として長きにわたり培った感性として、我々に染みついているものであると書かれています。

「恥じらう」「恥をかかせる」の違いなども、子どもたちは感覚的に親の仕草や態度を見て覚えます。

日々の生活の中での気づかい、心配りによって、それらを学んでいます。

様々な場面で、私たち大人こそ、さり気なく対処できる感性を養うことが大事だと学んだ気がします。

私たち大人も子どもに対する理想だったり要望だったり色々ありますが、大人が気づかいという感性を磨かなければ、子どもたちには伝わらないのでしょうね。

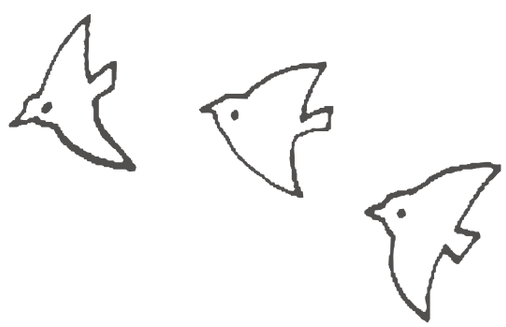
そして、岐阜市ＰＴＡのスローガンは「家庭力向上！」です。

まずは私たち大人が「気づかい・心配り・思いやり・我慢」が出来ないと、始まらない話なのだと思った次第です。

もう一つ、この本で子育てについて書かれている章があります。「三つ心、六つ躾、九つ言葉、十二文、十五理で末決まる」を解説されているものです。今とは時代が違うと言いたい人もいるかと思いますが、本質は同じかと思います。

保護者たるもの、子には最低限の教育だと思いました。

この本は、ビジネス書ではありますが、大人から子供へ伝えていかなければならない事が数多く書かれているように思いました。



ココロ屋

梨屋　アリエ　著
文研ブックランド
菅野　由貴子　絵

岐南町立岐南中学校PTA　戸崎　貴夫

この本は、娘が夏に読書感想文を書くために購入した本です。当時は読むこともなかったのですが、今回自宅の片づけをしている際に眼にとまりつい片づけはそっちのけで読んでいました。

この話は、主人公のひろき君と仲良しのゆうや君が喧嘩したことから始まります。ひろき君は、先生に「しっかり反省してココロを入れ替えなさい。」と言われ、学校の長い廊下でこ・こ・ろ・屋と出会います。こころ屋では様々な作られたココロと交換をしていきます。

ひろき君は「やさしいココロ」「素直なココロ」「あたたかいココロ」と交換をします。始めはどのココロもうまいこといきますが、「やさしいココロ」は人にやさしくしすぎて、自分の気持ちが言えなくなってしまい、「素直なココロ」では、言わないでいい事までココロのままに素直に言ってしまい、人に嫌な思いをさせてしまう。ひろき君は最後に天然もののココロと交換をする。その中には「やさしいココロ・素直なココロ・強いココロ・勇敢なココロ・くじけたココロ」といったように様々な要素の入った複雑な自分のココロでした。自分のココロと交換したことでゆうや君とも仲直りが出来ました。

子どもは身体も成長するのと同じで心も成長します。眼には見えず図れるものではない心の成長だけど、小学生から中学生へそして高校・大学・社会人になるまで様々な経験をして大きくなっていきます。私も、子どもたちに目先のことだけで叱ってしまったり、その時の感情で反応したりもします。いったん落ち着いて考えて行動することが自分にもまだまだ必要だなと考えさせられました。

ある年齢に達すると子どもとの会話が減ったり距離が出てきて、子どもたちだけの社会も形成され、その中で、その時にあった心で対応していきます。ただそれが適切なのかアドバイスする必要があることや、会話の中から何を考え何をしたいのかを、年齢に関係なく一緒に考えていくことが大切なんだということを、改めて考えさせられたなと思いました。

pleasure イラスト&クイズ

ＰＮ. いなしろ（羽島市）

ＰＮ. 柴垣心優（岐阜市）

QUESTION -3

目には見えない、切っても切れないものはな～んだ？

出題・吾郷悠太（中津川市）

〈答えは45ページ〉

子の思い

ぼくのお兄ちゃん

大野町立西小学校
三年　林 亜龍

ぼくには高校三年生のお兄ちゃんがいます。お兄ちゃんは小学校四年生の時から水泳の選手としてがんばってきました。一週間のうち五日間、夜おそくまで練習をしているので、大変だなあと思いました。

七月の終わりにお兄ちゃんの最後の大会があり、家族全員で応えんに行きました。そして、お兄ちゃんの出る二〇〇mバタフライの決しょう戦になりました。スタートして泳ぎ始めた時、応えん席にいたぼくは、思わずお兄ちゃんと同じスピードで、大きな声を出しながらついていきました。最後のレースなので、本当にがんばってほしかったからです。お兄ちゃんは力いっぱいがんばって二位になりました。今年、体をこわしてうまく泳げない時もあったので、よい結かが出てすごくうれしかったです。お母さんや応えんの人たちも泣いていました。

今まで九年間がんばってきたお兄ちゃんはすごいし、ぼくのあこがれです。ぼくも今年から水泳を始めました。お兄ちゃんみたいになれるようにがんばります。

仲間の姿が私を変えてくれた。

羽島市立桑原小学校
六年　佐藤 結香

「みんなに合わせなきゃ。」私の心の中にずっとあった気持ちです。私の学級は、人数が少なく、クラス替えもないので、幼なじみばかりの仲良しな学級です。だからこそ、授業のときも遊ぶときも「みんなから外れてはいけない。合わせなきゃ。」といつも思っていました。

四年生のとき、初めてリーダーに立候補しました。学級をよくしたいと思っていたけれど、自分の思いと行動は真逆になってしまいました。本当はちがう。間違っている。と思っていても、「そうです。」と言ってしまう自分。誰かが意見を言ったら、それに従うだけで、自分の思いを伝えられない自分がいました。

でも、私はそれが本当の仲間。自分の思いを押しつぶしてでも、みんな笑顔で楽しいのが仲間。と思い込んでいました。そう思えば思うほど、自分の気持ちを打ち明けることができなくなって、悲しくなり、学校に行きたくないと思う日もありました。

しかし、六年生になり、そんな自分でいいのかと真剣に考えました。「自分を変えたい。」という思いが強くなり、学級のためというより、自分を変えるために学級委員に立候補しました。しかし、また弱い自分が出てしまうのではないかと不安でいっぱいでした。

そんな私を支えてくれたのは、同じ学級委員のKさんでした。Kさんは、いつも前向きでやる気に満ちあふれています。学級のために、正しいと思うことを、はっきり言います。自分の弱いところも、はっきり言います。私は、Kさんの生き生きとする姿や、本当の気持ちを伝える姿を見て、自分が傷つくことから逃げて、楽なほうばかり選んでいることに気が付きました。そして、「この子となら、私も学級も変えられる。」と思いました。

それから、少しずつだけれど、自分の思いを伝えることができるようになりました。そして、私の思いに応えてくれる子が増えてきました。心から「うれしい。」と思いました。初めての感覚でした。本当の気持ちを伝え合える、それこそが本当の仲間だと思いました。

私を変えてくれたKさん、学級のみんなに感謝しています。中学校に行っても、メンバーは変わらないけれど、みんなが自分の本当の気持ちを伝え続け、高めあえる仲間でありたいです。

家族の決めごと

郡上市立高鷲中学校
二年　田中 亜由菜

私の家にはある「決めごと」があります。それは、「食事の時は、みんなが食卓についてから手を合わせ『いただきます』と言ってから食事を始める」ということです。

この決めごとは、いつのことからか自然とやるようになっていて、今では当たり前になっています。しかし時々この決まりをめんどくさいなと思うことがあります。それは、お腹がすいているときやタご飯の時刻が遅くなった時です。お腹がすいていると、すぐに食べたいという気持ちが大きくなり、座って待っているとイライラしてきます。遅い時刻になったときは特に我慢することが大変です。そんな時は

「めんどくさいな。先に食べ始めてもいいのに…」

と思います。

しかし、家族そろっての「いただきます」を続けていくうちに、そのことが幸せだなと感じるようになりました。こんな風に「家族そろっていただきます」とできない家庭が多いと思うのです。私もクラブ活動があると帰宅がかなり遅くなります。でも両親は必ず待っていてくれます。私一人で食事をするより、みんなで食べたほうが嬉しくなります。家族との会話も増え、食事がいっそうおいしくなります。

私が小学生の時です。母がまだ席についていないのに、食事を始めようとすると、

「すぐに行くで待ってて」

と言われたことを覚えています。この時は、母がなぜこんなことを言ったのか全くわかりませんでした。でも、「決めごと」を続けてきた今は、「料理を作った母も一緒に食べよう」という母の思いがあったのだろうと感じています。

「家族そろって『いただきます』と言う」

ほんの小さなことですが、この「決めごと」をこれからも大切にし、続けていきたいと思っています。

親の願い

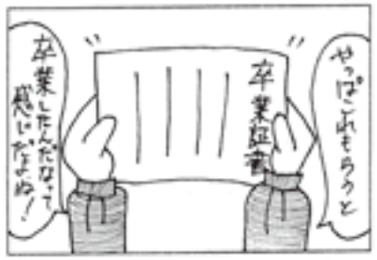
自分らしく、笑顔で

高山市立岩滝小学校PTA
副会長　中屋 真由紀

わが家には、中一の息子と小二

大垣桜高校 まんが研究部

卒業できる？



逆さ言葉

よくなくよ
（よく泣くよ）

出題・高野　遥（安八郡）

の娘がいます。

娘の通う岩滝小学校は、全校十二人の小さな学校です。緑に囲まれた環境でのびのびと学習し、行事も遊ぶのも全校活動。一人ひとりが役割をもって動かないと間に合わないため、自然と低学年のうちからテキパキ動けるようになっていきます。

少人数のため、先生方の目が行き届き、しっかりサポートしてもらえる、学校・PTA・地域が一体となって子どもたちを温かく見守るアットホームな学校です。

ただ一つの悩みは子どもが少ない！こと。今年は新入生がなく、一学年に一～五人ずつしかいません。子どもたちはとても楽しく通っているのですが、中学校に上がったとき、大勢の中でうまくやっていけるのか？友達は作れるのだろうか？というのが一番の心配でした。

上の息子は、小二で太道という武道に、小四で少年野球に入らせました。もちろん、友達を作ってほしかったからです。どちらも六年生まで続けましたが、みんなといても、いつも遠慮がちにしていました。

そしていよいよ中学生。入学式後、誰とも話さず早々に帰りたがる息子に、ますます不安になりました。こんなことで大丈夫なの？

しかし、初めての参観日、そこにはニコニコして隣の席の友達と話すわが子の姿がありました。授業中、多少元気すぎて冷や汗が出ましたが、それ以上にほっとしました。

勉強しろとか身体を鍛えろとか、いつも色々口やかましく言ってしまいますが、笑顔でいてくれればいいのです。自分がありのままでいられる仲間を、場所をつくってほしい。クラスでも部活でもいい。それが難しければ学校以外のところでもいいのです。

自分らしく。笑顔で。これが母の一番の願いです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

大切にしたいこと

中津川市加子母小中PTA
会長　今井 広一

私の家には、高二と中二の娘がいます。高校の勉強はさすがに難しくて宿題を一緒に解くとか、考えることはありませんが『お父さんベクトル計算…』と言って見せてくれたり、漢文、古文の本も見たりと自分の高校時代を思い出します。

ベクトルも忘れてしまいましたが、苦労した話など、よく話します。勉強方法を工夫したり悩んだりした事は同じだなと感じます。

ただ私の頃とまったく違うことは電子辞書なるものを使い、国語辞典や英和辞典などは一切使いません。高校入学の時、『少し難しい辞書を使うように』と勧めたところ妻が『今は電子辞書だから』と言ってあっさり終わってしまいました。

スマホも使っていない私は遅れていますが、ページをペラペラめくり一文字ずつ確認しながら辞書を引く作業は大変でしたが、ことばを探し当てたときの『これかぁ』という思いを感じ取ってほしいと思います。

中学生の勉強はまだなんとかなります。問題のヒントは与えておいて答えは言いません。もし間違っていたら…。二人で答えを出すと隣で高二の娘がそれについて解説をするわけですが、特に二人が興味を持っている日本史の話になると、覚えたことや習ったことで話が盛り上がります。分からない事とか疑問に思った事があればすぐ本で調べられるように参考書や地図帳などを近くに置くようにしています。

私の母は何でも一生懸命やる人でしたが、特に教育に関しては熱心なところがありました。『勉強、勉強』と口うるさく言うことはありませんでしたが、教科書をよく読み大切にするようよく口にしていました。

中二の時「一生懸命勉強して大学へ行ってそこでもっと勉強してそれを仕事に活かすように」と言われた事がありましたが、自分が中卒だったからではないかと思います。子どもに教育の環境を整えてやらなければと思うのは母の影響が大きいと思います。

欲なことを言えばキリはありませんが、日本語をもっと勉強して欲しいと思います。高校時代英語の先生が「母国語である日本語を勉強してその文化、意味を理解して下さい」と。予備校へ通っている時の英語の先生も「私は中国人です。しかし私の方があなたたちより日本語は上手です。もっと日本語を勉強して下さい」と、流暢な日本語で諭すように言われた事を覚えています。

ここ数年高校生を前に話しをすることがありますが、最後に決まって言うことは『勉強も部活も精一杯やって、友達をたくさん作って仲間も増やして、そして楽しく充実した高校生活を送って下さい』自分の子どもに言っている気持ちで。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

教育の窓

地域の中で育つ子どもを

恵那市立恵那北小学校
教頭　石川 斎

昔の日本では三世代同居型の家族が多く、家庭と地域のつながりも今より密接で、どの家の子どもたちも「地域の子ども」として見守り、育てていました。私自身、自分の子どもの頃を振り返ると、近所に「こわいおじさんやおじいさん」がおり、遊びの中で注意されたり、叱られたりした経験が多々あります。このような経験の中で覚えた「人に迷惑をかけてはいけない」「礼儀やあいさつをきちんとする」などの事柄は、今の自分という人格を形成する基となっていると実感しています。

ところが、現在は家族の形態や生活様式が大きく変わり、核家族化や地域のつながりの希薄化が進み、保護者と学校のそれぞれにかかる子育ての負担が大きくなっています。

本校では昨年の十二月に保護者アンケートを実施しました。その中で「家庭でのあいさつ」「早寝、早起き、言葉遣い」「保護者同士による子育ての相談」「地域行事への子どもの参加」など家庭や地域の子育てに関する質問事項で、約九割の家庭が「できている」「ほぼできている」という結果が得られ、地域の教育力の高さを感じました。

「いつもおばあちゃんの手伝いでやっているよ。」

と言いながら、グランドの草取りを手伝ってくれる児童が大勢います。地域や家庭による教育がこん

大垣桜高校 まんが研究部

卒業…？

逆さ言葉

わたしたわしわたしたわ
（私タワシ渡したわ）

出題・伊藤慎介（山県市）

な姿で生かされていると思いました。昨年の十一月には恵那北小学校創立五十周年記念事業として、地域の方々の前でふるさと発表会を行いました。児童は学年ごとに校区の伝承、歴史、自然、産業などについて調べたことを劇やプレゼンテーションを使って発表しました。たくさんの地域の方々に教えられ、支えられて学習したことを発表することで、児童は改めて自分たちの住む地域や学校のよさがわかり、地域を誇りに思う心が養われたと思います。発表を見ていただいた地域の方の感想にこのようなものがありました。

「現在の若い親たちは自分勝手がまかり通っているように見えましたが、子どもたちの発表を真剣に見入っている姿を見て、思いと行動が違わない生活や考えを教えていただきたいと感じました。大人もがんばろうという思いができたと考えます。」

こうした言葉に励まされながら、地域、家庭と学校がいっしょになって子どもを育てることができるよう、がんばっていきたいと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

挨拶は人と人をつなぐ

各務原市立緑陽中学校
教頭　塚本 盛勝

「おはようございます。」本校では、毎朝、係やボランティアの生徒、保護者、教職員がいっしょになって挨拶運動をしています。進んで大きな声で挨拶をする生徒、挨拶を返してくれる生徒、微笑みながら会釈をしていく生徒、そのまま無言で通り過ぎる生徒など、様々です。

最近は、この校区でも少子化や核家族化、一人暮らしの高齢者の方の増加などの影響で、人と人が積極的に関わる機会が少なくなっています。このことは、子どもにとっても大人にとっても、他者への働きかけかけや仲間同士の結びつきが少なくなっていくことにつながります。学校生活の中でも、自分が分からなかった問題が解ければいい、自分にふりかかっている問題が解決できればそれでいい、自分の係の仕事として一生懸命取り組むけれど、関わりのない仕事まではなかなか進んでしない、といった姿が見られる時があります。

私は、これからの社会に生きる子どもたちには、周りの人への働きかけや人と人とのつながりこそ大事にできる人間になってほしいと願っています。

そういった中で、挨拶はコミュニケーションのツールとして、とても大切なものであると思います。

先日、今までこちらが挨拶をしても、無言で通り過ぎていたA君が、頭を下げて通り過ぎたことがありました。これは、チャンスと思い、「部活がんばっとるね。」と続けて話しかけると、また、頭を下げて、にこっとしました。こんな変化があると、挨拶一つで子どものようすを感じとることができます。今日は何か楽しいことがあるのかな？朝、家で何かあったのかな？体調がすぐれないのかな？など、子どものようすをつかむことができるのです。

挨拶をすると、どんなよいことがあるのでしょうか。まず、「人と人が関わりをもてる」ということです。何もしない状態から、挨拶をすることで、相手にこちらからメッセージを送ることができ、一方通行であっても何かしらの思いは届きます。次に、「気持ちがいい」ということです。返事があれば、うれしい気持ちになりますし、笑顔で返されれば楽しく過ごすことができます。さらに、「会話につながる」ということです。挨拶がきっかけで、興味のある話や今考えていること、思っていることを話せるようになります。

挨拶の習慣がある家庭で育てられた子どもは、きっと外でも自然に挨拶ができるようになります。まず家庭から、挨拶で人と人のつながりを広げていきましょう。

親子で はてな

3月号のクイズ

Q1

3月20日（月・祝）は春分の日ですが、春分の日とはどういう日でしょうか？

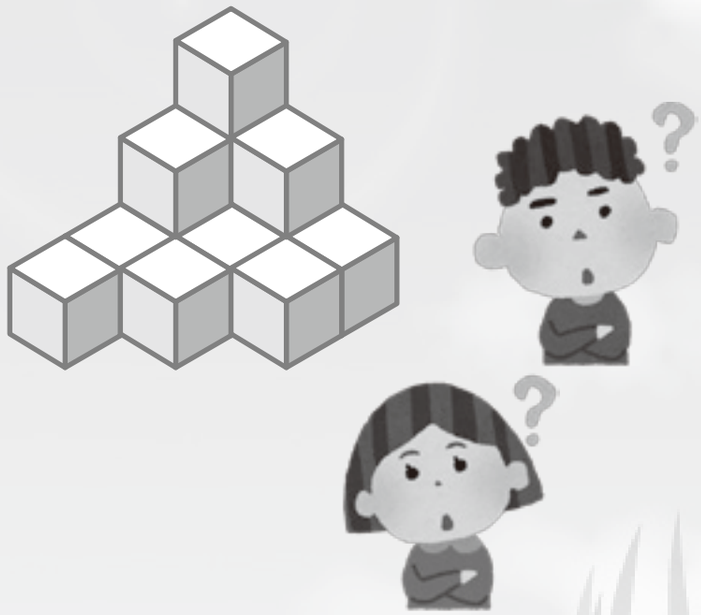
① 昼が長く、夜が短い。

② 昼が短く、夜が長い。

③ 昼と夜がほぼ同じ。

Q2

積み木の問題です。積まれた同じ大きさの四角い積み木が何個あるのか数えましょう。



1月号クイズ答え

Q1　D. 酉（とり）

Q2　鷹（たか）

1月号のクイズ当選者

伊藤　聖菜（岐阜市）　池田　琴菜（大垣市）
田中　　葵（岐阜市）　勝　有萌果（不破郡）
金森　愛苗（岐阜市）　高野　　遥（安八郡）
赤堀　怜希（岐阜市）　服部　　蒼（美濃市）
高木琉ノ介（瑞穂市）　間野　春紀（多治見市）
佐藤　　瞭（瑞穂市）　吾郷　悠太（中津川市）
伊藤　慎介（山県市）　尾崎　伸明（高山市）
横山　輝大（山県市）

応募方法

応募者は、はがきで、3月末までに下記の宛先へお送りください。
（1人1枚・当日消印有効）
※クイズの答えは1問だけでもOKです。

宛先　〒500−8824
岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内
岐阜県PTA事務局
「わが子のあゆみ編集部」

なお、応募はがきには『わが子のあゆみ』への感想・意見やなぞなぞの問題と答え、逆さ言葉などを記入してください。

- 3月号クイズの答え
- 郵便番号・住所
  学校・学年・氏名
  保護者名
- 『わが子のあゆみ』への感想・意見
- 「なぞなぞ」の問題と答え
- 逆さ言葉

お試しクッキング

下呂のみそ鶏（けい）ちゃん

岐阜県学校栄養士会

鶏ちゃんは、岐阜県の下呂市を中心とする南飛騨地方や、郡上市を中心とする奥美濃地方の郷土料理です。

作り方は、フライパンや鉄板で、しょうゆや味噌のタレに漬け込んだ鶏肉をキャベツなどと一緒に焼くだけ。これから旬をむかえ、甘みがあって柔らかい春キャベツを使う場合は、鶏肉にある程度火が通ってから最後にさっと炒めるとおいしく出来上がります。お好みで、タマネギやニラ、もやしなどの野菜を加えれば栄養満点な一品となります。

鶏ちゃんを食べた後には、鶏肉と野菜の旨味がたっぷり詰まった残りダレに、締めのうどんや焼きそばを入れてもおいしいので、ぜひ試してみてください。

作り方

❶ 鶏肉は一口大に切り、Ⓐの調味料に漬けこんでおく。

❷キャベツは3〜4㎝程度のざく切り、にんじんは短冊切り、ピーマンは細切りにする。

❸フライパンや鉄板に炒め油を熱し、❶と野菜を一緒に入れ、鶏肉に火が通るまで炒める。

材料 4人分

鶏もも肉…… 1枚(250g)

Ⓐ
- ミックスみそ…… 大さじ1(18g)
- にんにく…… 1/3片(2.5g)
- ごま油…… 小さじ1(4g)
- 三温糖…… 小さじ2(6g)
- 薄口しょうゆ…… 小さじ1(6g)
- 酒…… 小さじ1(5g)

キャベツ…… 2枚(100g)

にんじん…… 1/6本(25g)

ピーマン…… 1/2個(15g)

炒め油…… 適宜

●栄養価（1人あたり）

エネルギー	138kcal
タンパク質	9.9g
脂質	8.2g
カルシウム	20mg
鉄	0.5mg
亜鉛	1.0mg
ビタミンA	65μgRE
ビタミンB_1	0.05mg
ビタミンB_2	0.11mg
ビタミンC	14mg
食物繊維	0.8g
塩分相当量	0.9g

information

■作品を募集しています。イラスト・なぞなぞ・逆さ言葉などの作品を募集しています。イラスト・絵手紙はハガキに描いてお送りください。ペンネームを使う場合にも、郵便番号、住所・学年と氏名を忘れずに。写真・書写は郵送願います。なぞなぞ・逆さ言葉は「親子ではてな?」の解答とともにお送り下さい。

宛先はいずれも　〒500-8824　岐阜市北八ツ寺町7
岐阜県校長会館内「岐阜県PTA連合会・作品係」まで。

採用の分にはお礼をさしあげます。

■本誌の購読について

本誌は年間5回発行（7・9・11・1・3月）されます。年度始め（4〜5月）と7月の2回、各学校PTAを通じて予約購読募集を行います（1冊200円、5冊1,000円）が、年度途中でもお求めいただけます。学校または県PTA事務局へお問合せください。

■1月号を読んで

毎月、特集のページを楽しみにしています。子どもたちと関わる上で参考になることが多く、まずはそのページ!と開いています。Gさん

「わが家の約束」が良かったです。就寝前に絵本を読み、9時には就寝がすばらしいなあ〜と思い読んでました。我が家は、仕上げみがきとフッ素のみ、毎日続けている事ですね。　Tさん

「話そう!語ろう!わが家の約束」兼山家の巻。就寝前の読み聞かせを続けられるのは素晴らしいですね。我が家も小５の息子がいますが、今から私が読み聞かせを試してみても、息子は興味を示しません。生後半年からほぼ10年間続けてきたからこその就寝前のステキなコミュニケーションとなっているんですね。ずっと続けられると好いですね。　Mさん

北方中学校の部活は、文科系が多いですね。私の学校は吹奏楽と美術しかないので、英会話とか家庭科とか合唱、パソコンなどやってみたいです。ちなみに私は吹奏楽でパーカスです。　Iさん

この冬休みに、食事を一食分を作る宿題がありました。普段、あまり手伝わないので、順番にやっていかないと出来ていかないことを学びました。少しずつ手伝いをしようと思いました。　Iさん

■編集後記

私たちの社会は、一人一人がその時その時の判断の連続で形成されています。一人一人の一日も人生も、自分で選んだ思いの積み重ねで終わります。昨今の日本と日本を取り巻く世界の情勢に、胸騒ぎのような何か心が穏やかでないうごめきを感じます。これまで見えなかった価値観の台頭です。その時の判断が最善であったとしても、後にそれが間違いであったと判断されたことは歴史が物語っています。子どもたちの未来を案じ、17歳でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんの受賞スピーチ（抜粋＝訳・英語力.biz藤田マリオより）を紹介します。

教育は人生の恵みの一つであり、生きる上で欠かせないものです。このことを私は、17年間の人生で経験しました。（パキスタン北部の）スワート渓谷にある故郷では、私はいつも、学校に通って新たなことを学ぶことを愛していました。何か特別なことがあると、私は友達と一緒に（植物染料の）ヘナで手を装飾したのを覚えています。花や模様を描くかわりに、私たちは数式や方程式を書いたものでした。

私たちは教育を渇望していました。なぜならば、私たちの未来はまさに教室の中にあったのですから。ともに座り、学び、読みました。格好良くて清楚な制服が大好きでしたし、大きな夢を抱きながら教室に座っていました。両親に誇らしく思ってもらいたかったし、優れた成績をあげたり何かを成し遂げるといった、一部の人からは男子にしかできないと思われていることを、女子でもできるのだと証明したかったのです。

ですが、こうした日々は続きませんでした。観光と美の地であるスワートが突如として、テロリズムの地と化したのです。４００以上の学校が破壊され、女性たちはむちで打たれました。人々が殺されました。そして私たちのすてきな夢は、悪夢へと変わったのです。

教育は「権利」から「犯罪」になりました。女の子たちは学校に行くのをやめさせられました。しかし、私をとりまく世界が突如として変わったとき、私が優先すべきことも変わったのです。

私には二つの選択肢がありました。一つは黙って殺されるのを待つこと。二つ目は声を上げ、そして殺されることです。私は後者を選びました。声を上げようと決めたのです。

私と同じ年で、とても仲がいい級友の一人は、いつも勇敢で自信に満ちた女の子で、医者になることを夢見ていました。しかし、夢は夢のままなのです。彼女は12歳で無理やり結婚させられ、息子を産みました。たった14歳のときです。彼女なら、とてもいいお医者さんになれたと思います。ですが、なれませんでした。なぜなら、女の子だったからです。

なぜ「強い」といわれる国々は、戦争を生み出す力がとてもあるのに、平和をもたらすことにかけては弱いのでしょうか。

なぜ、銃を与えることはとても簡単なのに、本を与えることはとても難しいのでしょうか。

なぜ戦車をつくることはとても簡単で、学校を建てることはとても難しいのでしょうか。

今年度の最終号をお贈りします。来年度もご愛読をお願い致します。

岐阜県PTA連合会ホームページのQRコードです。「わが子のあゆみ」のバックナンバーが閲覧できます。

なぞなぞの答え

①リハーサル　②剣道
③空気

■平成29年7月号のお知らせ（予告）

特集＝先生!ありがとう!／表紙＝岐南西小／学校のたからもの＝瑞穂中小・温知小・伏見小・糸貫中／わが家の宝物＝羽島中央小／家庭教育応援団／お弁当の日＝山王小／保健室ノート＝向陽中／私の先生＝古川中／半生記＝市橋小／一冊の本＝那加三小・双葉中／わが家の約束＝藍見小・大垣南中／ボランティアニュース＝春日小・大野東小・宮地小・揖斐中／子の思い＝長森北小・落合小・江並中／親の願い＝今渡北小・桜ヶ丘中／教育の窓＝神戸小・笠原中／お試しクッキング／ふるさとの伝承＝興文小／きらり!キッズ!＝上原小／我らが部活＝恵那西中／私たちのPTA＝瑞浪南中

わが子のあゆみ

平成29年3月1日 発行
春風号　第68巻5号
通巻第447号

頒価　200円（年間 1,000円）
＊お問合せ申込みは、各学校または右記事務局へ。

編集／岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
発行／岐阜県PTA連合会
〒500-8824 岐阜市北八ツ寺町7 岐阜県校長会館内
電話／058-262-3257　FAX／058-262-3259
ホームページ／http://www.g-pta.com
Eメール／info@g-pta.com
印刷／サンメッセ株式会社

高山市立久々野小学校 ふるさとの伝承

りんごの栽培活動

久々野小学校校区は、高山市南部に位置し、山に囲まれ、川が流れる自然豊かな地域です。朝昼の寒暖の差が大きく、それを利用した果樹・野菜栽培が盛んで、作られる産物は「りんご」「トマト」など、多くの種類があり、地域外にもその味のよさはよく知られています。

本校では「地域のよさ」を学ぶために、地域の方の仕事への思いにふれる郷土学習に取り組んでいます。三十年程前から地元のりんご農園にご協力をいただき、五年生が「りんごの栽培活動」を行っています。

一年間の栽培活動は「摘花」「摘果」「葉摘み」「収穫」です。その作業のなかで、農家の方の「安全でおいしい果物を作るための工夫や努力」を学びます。春に行う「摘花」と「摘果」は、中心となる花と実を残して他の花や実を落とす作業です。一つひとつ手作業で取る地道な作業ですが、こうした手間をかけることが美味しいりんご作りにつながることを学びます。また農園では、農薬を使わずりんごに虫を寄せ付けない方法を考案されていることを知ります。それは、お客さんに安心して美味しさを味わってもらうためで「費用はかかるけれど安心して美味しく食べてもらうことが一番だ。」という農家の方の熱い思いを感じ取ることができます。

三回目の作業は「葉摘みと玉回し」で、葉を摘み、りんごに太陽の光を当てて色づかせます。りんご一つひとつに語りかけるように作業をして一か月後、冷え込みの強い日が二日程あると葉の色が変わり、収穫の日を迎えます。

児童はこれらの作業を通して、次のような感想を持ちました。

「年間二十種類のりんごを収穫すると聞きました。りんごや葉を傷つけないように作業をすることはとても大変でした。農園の方は何百個ものりんご一つひとつを丁寧に手作業でやってみえて、本当にりんごを大切にしてみえるのだと思いました。」

「気温の変化により、各作業の時期が決まってくることを知り、久々野の気候を利用した産物作りということがよくわかりました。」

収穫したりんごは、全校児童に配ります。児童は五年生が配るりんごを毎年楽しみにしています。この日は学校中がりんごの甘い香りに包まれます。さらに加工品を作り、近くのスキー場のお客さんにゼリーを試食してもらったり、農家の方に作り方を習ってアップルパイを作り、家族に食べてもらったりしています。また、参観日に学びを発信すると「今まで知らなかったりんご作りの過程を知ることができてよかった。」という感想が寄せられました。

この栽培体験は、地域の方が美味しい産物を作るためにしている工夫や努力を知り、作り手の願いや思いがあってこそ名産品となることを学ぶ機会となっています。

多くの方に支えていただき三十年以上続いているこの活動を通して、今後もふるさとに誇りをもち、ふるさとを愛する子ども達が育つことを願っています。

▲農園の方から収穫の仕方の説明を聞く

▲摘花作業を行う子ども達

▲葉摘み・玉回しをする子ども達

▲収穫したりんごの選別

▲たわわに実ったりんごの収穫

▲みんなでりんごの収穫準備

▲りんごを配ってもらって笑顔の下級生

▲全校児童にりんごを配る

▲アップルパイ作り（平成27年度）

▲スキー場でゼリーを試食していただく（平成26年度）

◀地域講師の先生に
アップルパイの作り方を
教えていただく

きらり！キッズ！

東明小学校は、地域の教育力を生かし地域に学ぶ開かれた学校づくりとして「陶芸と茶道」に親しんでいます。そして、地域の伝統・文化に親しみ、生まれ育ったふるさとへの誇りと愛着を育てる体験学習に二十年前から取り組んでいます。

陶芸

「陶芸」は、「美濃桃山陶の聖地」に学ぶをテーマにして、学年ごとに陶芸作品を作っています。一年生は抹茶茶碗に絵付けした「世界に一つだけのマイ茶碗」、二年生はたたらづくりのお皿「一枚のたたらから思い思いのお皿」、三年生は野焼きに挑戦「夢を叶えるシーサー」、四年生は志野焼に挑戦「手びねりの器」、五年生は地模様のあるお皿「二色の粘土のお皿」、六年生は花瓶「幸福の花瓶」と、毎年創作活動をしています。教職員も、夏休みには校区の陶芸苑を利用して、校内研修を兼ねた作陶を楽しみながら行っています。毎年十一月に、全校児童と教職員、家庭教育学級生の保護者による作品展を開催しています。

抹茶茶碗に絵付けした
「世界に一つだけのマイ茶碗」

▲陶芸（1年生）

▲陶芸（5年生）

地模様のあるお皿
「二色の粘土のお皿」

茶道

「茶道」は、一年生でマイ茶碗を作り三年生で茶道のお点前を学びます。十二月には、茶道師範の指導のもと、三日間にわたって全校お茶会を開き、学年の発達段階に応じて、全校児童が茶席で抹茶を味わったりお点前をしたりして茶道に親しんでいます。また、お客様をお招きして茶道を通したおもてなしもしています。三年生以上の児童は互いにお茶を点て合います。一・二年生は五・六年生にお茶を点ててもらったりお作法を教えてもらったりします。東明小の子どもたちは、入学してから卒業するまで毎年お茶会体験を重ね『和敬清寂』の精神を育んでいます。

『和敬清寂』の精神を育む

▲夏休み親子七夕茶会

お客様をお招きして
茶道を通したおもてなし

▲全校お茶会

本年度は、さらに発展して、夏休みに「親子七夕茶会」、秋には六年生「親子茶会」を開きました。また、九月には、オーストラリアのプレンベール小学校が来校したときも、茶道でおもてなしをしました。外国の同年代の児童との交流を通して、日本から外国へと視野を広げ、積極的に外国の文化や人と関わろうとする心情や態度も育てています。今回の国際交流を通して、自分たちの生活するふるさとの伝統・文化のよさや素晴らしさを再認識し、ふるさとに積極的に関わろうとする思いを強くすることができました。

オーストラリアの
プレンベール小学校が来校、
茶道でおもてなし

▲国際交流

夢中！熱中！我らが部活

郡上市立白鳥中学校

「共に創る」学び合う・友と高まる・鍛え合う　白鳥中学校

見せろ! 白中スピリッツ

一人ひとりがレベルアップし、ワンランク上の大会・コンクールを目指します。

吹奏楽部

吹奏楽部では、2年生14名、1年生14名の計28名で活動しています。私たちは、音を心で楽しむ「音心楽」をモットーに日々練習に励んでいます。練習中は、1・2年生の関係を創るために、積極的に声を掛け合っています。コンクールは、団体戦なので、日々の練習で培った絆を大切に全員で取り組んでいます。夏のコンクールに向けてさらに頑張りたいです。

女子バスケットボール部

女子バスケットボール部では、2年生10名、1年生6名、計16名で活動をしています。目標は「県大会出場」を目指して日々の練習で声を出し、1回1回の練習を大切にして活動しています。学校生活で大切にしているあいさつも意識して、技術面と生活面のどちらも成長できるように取り組んでいます。バスケットボールができる環境を与えてもらっていることに対しての感謝を忘れず、仲間と共に「県大会出場」を実現できるように全力で頑張ります。

男子バレーボール部

男子バレーボール部の目標は「県大会出場」です。初心者が多く、技術面で多くの課題がありますが、ボールを正確につなぐプレーと、次の動きを意識することを大切にして練習に取り組んでいます。いつも支えて下さる方々への感謝の気持ちを忘れず、仲間と声をかけ合いながら、"拾ってつなげるバレー"で目標を達成できるように、これからも精一杯頑張ります。

美術部

美術部は1年生12名、2年生7名の計19名で活動しています。主に体育祭の看板制作と油絵展への出展を通して、部員同士アドバイスをし合い、日々技術を高め合っています。体育祭の看板制作では、部員全員でデザインから案を出し合い、協力して1枚の大きな作品を作っています。油絵では、長い時間をかけて作品と向き合い、納得のいく作品を描いていきたいです。

ソフトボール部

私たちソフトボール部が大切にしていることは、2つあります。1つ目は、あいさつです。先生やコーチに大きな声であいさつをすることを心がけています。2つ目は、時間を守ることです。1回1回の練習を大切にするためにもすばやく行動しています。支えてくださる方々や家族に感謝して、少ない人数ですが部員全員で協力して頑張っています。

女子バレーボール部

女子バレーボール部の目標は「地区優勝!県№.1」です。そのために全員で声を出すことと、最後まであきらめずにボールをつなぐことを頑張っています。声を出すことで、チームの雰囲気もよくなり自然と体が動いてきます。最後まであきらめない気持ちを全員がもてたら、一歩でも目標に近づくことができます。日頃の感謝を忘れず、これからも頑張っていきます。

コンピュータ部

コンピュータ部は、「集中して活動に取り組むこと」と「仲間と支え合うこと」を大切にしてします。タイピング練習ではタッチタイピングで正しく速く文字を入力することを目指し、プログラミングではビジュアルプログラミング言語を使い簡単なプログラムをつくる練習に取り組んでいます。仲間と支え合いながら、一人ひとりの技術を高めていきます。

卓球部

私たち卓球部は、19名で活動しています。「卓球を楽しめる部活」を目標に、仲間と励まし合ったり、技術的なアドバイスをし合ったりして、練習に一生懸命取り組んでいます。そして、自分たちの技術が向上していく喜びを味わいながら、仲間との卓球を楽しむことができています。今後も、中体連で自分たちが満足できる結果を出せるように、切り替えをつけて仲間と共に頑張ります。

男子バスケットボール部

男子バスケットボール部は県大会出場を目指して、練習に取り組んでいます。練習では、ディフェンスから、自分達のボールになったら速攻でシュートを確実に決めることを意識しています。新人戦では結果が出なかったけれど、練習試合を重ね確実に成長していると思います。部員全員一丸となり、いろいろな方に支えられていることに感謝して春季大会、中体連で力が発揮できるよう頑張ります。

剣道部

白鳥中学校剣道部の部訓は「流汗悟道」です。日々の稽古では、厳しい練習もありますが、そんな時こそ自分を鍛えるチャンスだと捉え、一人ひとりが全力の声を出して、技術だけではなく、心も鍛えています。僕達の目標は、中体連県大会出場です。この目標を達成できるように、日常生活から心を鍛え、日々、精進していきます。

バドミントン部

中体連での地区大会優勝と県大会での1勝を目指しています。目標達成のために、日頃から「声を出すこと」「あいさつをすること」を大切にして、雰囲気のよい部活にすることを心がけています。バドミントンは個人競技ですが、全員で声を出してチームワークを高めて、お互いに切磋琢磨しています。支えてくださる人達の期待に応えられるように頑張ります。

野球部

野球部は昨年の先輩が成し遂げられなかった全国大会を目標に日々の練習を頑張っています。冬のトレーニングで体力や筋力をつけ、春や夏の大会に臨んでいきたいです。「声が大きい」という長所を生かし、守備からリズムをつくる野球を目指します。目標に向かう中で、先輩たちのように仲間に声をかけながら、チームで高まっていける野球部を創っていきます。

柔道部

私たち柔道部は、3人で活動しています。部員数は少ないですが、大きな声を出し、教え合いながら練習に取り組んでいます。休日には、同じ郡上市の中学校と合同練習をしています。平日の学校ではできない練習ができるのも、他校の柔道部員のおかげです。目標は県大会出場です。県大会に出場して、先生方や保護者、そして一緒に練習してくれた仲間に恩返しをします。

ソフトテニス部

ソフトテニス部の目標は「高め合う」ことです。学年男女関係なく練習したり、声をかけ合ったりして活動しています。そして、練習の時だけでなく、日常生活から姿や気持ちを高めるように心がけています。最後までボールを追いかけること、前衛と後衛の役割を考えながらプレーをすることを大切にして、これからも仲間と共に高め合っていきます。

サッカー部

サッカー部は、2年生13名、1年生9名の計22名で活動しています。日頃から大切にしていることは、自分たちを支えてくれる親さんやコーチ、先生方に感謝の気持ちをもち、活動に全力で取り組むことです。昨年度は、先輩方が春季県大会優勝というすばらしい結果を残してくれました。今年度、自分たちは、新人戦の県大会で自分たちの力を確認することができました。先輩方に少しでも近づけるよう、日頃の練習から感謝の気持ちを大切に、全力で取り組んでいきます。

私たちのPTA

瑞穂市立穂積小学校PTA

平成二十八年度PTAスローガン

学校と家庭と地域でつながるほづみの輪

学校紹介

瑞穂市立穂積小学校は、濃尾平野の北西、長良川と揖斐川に挟まれた自然豊かな瑞穂市の東部にあります。二十六学級、七九七名の児童が活動している大規模な小学校です。

本校では、歯科保健指導に特に力を入れています。

昭和五十六年に卒業生の寄付によって『歯の塔』が設置されました。歯の塔に抜けた歯を納め、乳歯に感謝し生えてきた永久歯を大切にする気持ちを育成しています。

フッ化物洗口

学期ごとに、歯垢染め出しと養護教諭による歯磨き指導を行い、年間一回、カリオスタット（むし歯予測試験法）と歯科衛生士による歯科指導を実施しています。

毎日の給食が終わると、放送を通して「きゅうしょくおわったよ～♪」で始まる『歯磨きの歌』が学校中に流れます。これは、穂積小の児童と教員が作詞・作曲し、合唱した曲です。この曲に合わせて、全校児童が、歯磨きとフッ化物洗口液でのうがいに取り組み、健康な歯づくりを目指しています。

歯科衛生士による歯科指導

PTA紹介

「築こうあなたが主役のPTA」をスローガンに、全員参加のPTAであることを方針にしています。各学級から選出された四委員会と、各地区より選出された二委員会があり全員が協力、融和し活力のある活動を進めています。

○総務委員会

学級・学年懇談会を開催しています。

また、PTA会員と五年生児童を対象とした水難救助講習会を開催し、命を守るための心肺蘇生法とAEDの使い方の講習を受けました。

納歯式

広報誌いぶき

水難救助講習会

○広報委員会

広報誌『いぶき』を年三回発行しています。運動会、弁当の日などの学校行事やPTA活動を取材し、親しみやすい広報誌になるよう創意工夫しています。

地域の皆さんにも回覧し、地域とのつながりを大切にしています。

○厚生委員会

ベルマーク・インクカートリッジ・テトラパック空き容器の回収を行っています。地域の方にも協力をお願いし、毎年約十万点を集めています。昨年度は給食用白衣を購入し、学校生活に活かしています。

テトラパック空き容器回収箱

母親成人委員会による歯科保健研修会

○母親成人委員会

『からだ元気カレンダー』を年三回実施し、歯磨き、朝ごはん、睡眠時間など、親子で生活を見直すきっかけづくりをしています。

また、歯科保健研修会を隔年で開催しています。

○育成委員会

地区ごとに資源回収を年三回行っています。収益金は、緊急連絡時eメール運営費、学校図書購入などにあてています。

また、緊急時に子どもたちが安全に下校できるよう、学校地区連携引き渡し訓練を校外生活指導委員会と行っています。

○校外生活指導委員会

自転車点検や交通安全教室などを通して、子どもたちに交通安全に関心をもってもらう機会を設けています。また、PTA会員による通学路安全パトロールや交通当番など、子どもの安全を守る活動を行っています。

様々な取組を学校と家庭と地域で連携し、子どもたちの生活が豊かになるような活動をこれからも進めていきたいです。

育成・校外生活指導委員会による引き渡し訓練の様子

がんばる子らの
汗と笑顔と眼差しと

高山市立宮中学校

バトンを繋ぐ

気持ちで聞く

教科担任と

教師と共に授業をつくる

授業で意見交流

小学生と朝のハイタッチ

地域と一体の運動会

地域行事にボランティア参加

朝のボランティア掃除

片寄せあってＤＩＧ

わが子のあゆみ

2017.3 No.447 春風号
第68巻5号

発行 ： 岐阜県PTA連合会
〒500-8824　岐阜市北八ツ寺町7　岐阜県校長会館内
編集 ： 岐阜県PTA連合会広報委員会「わが子のあゆみ」編集部
頒価 ： 200円　年間1,000円
この刊行物は一部岐阜県からの助成金を受けています。

バックナンバーのお求めは
058（262）3257
県PTA連合会事務局へ